

# 通 信



日 仏 東 洋 学 会

# 日仏東洋学会

会 長：中谷英明

名誉会長：Bernard THOMANN

顧 問：興膳宏

評 議 員：Didier DAVIN・Marc-Henri DEROCHE・濱田正美・飯島孝良・岩尾一史・彌永信美・門田眞知子・加藤純章・亀山隆彦・木島史雄・熊谷誠慈・京戸慈光・牧野元紀・松原康介・御牧克己・森由利亜・中島隆博・中谷英明・大谷暢順・田中文雅・土屋昌明・山畑倫志

代表幹事：小関武史

会計幹事：手嶋英貴 会計幹事補佐：長谷川琢也

監 事：Didier DAVIN・森賀一恵

運営委員会：会長（委員長）、代表幹事、会計幹事、学術・企画委員長、広報委員長、監事

学術・企画委員会：代表幹事（委員長）、会長、当番幹事（輪番制）

広報委員会：熊谷誠慈（委員長）、岩尾一史（『通信』編集）、亀山隆彦（『通信』編集）、山畑倫志（ホームページ管理；メーリングリスト管理）、飯島孝良（フェイスブック管理）

## 事務局

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67

龍谷大学法学部 手嶋英貴研究室

## 『日仏東洋学会通信』編集局

〒600-8268 京都府京都市下京区七条大宮東入ル大工町125-1

龍谷大学文学部 岩尾一史

表紙題字 元・趙孟頫の六体千字文から  
高田時雄氏集字

カット イラン陶器模様（13世紀）から  
桑山正進氏作

## 日仏東洋学会会則

- 第1条 本会を日仏東洋学会と称する。
- 第2条 本会の目的は東洋学に携わる日仏両国の研究者の間に、交流と親睦を図るものとする。
- 第3条 本会の目的を実現するために次のような方法をとる。
- (1) 講演会の開催
  - (2) 日仏学者の共同の研究及びその結果の発表
  - (3) 両国間の学者の交流の促進
  - (4) 仏人学者の来日の機会などに親睦のための集会を開催する
  - (5) 日仏協力計画遂行のために学術研究グループを組織する
- 第4条 事務局（本会所在地）は会計幹事の所属する機関内におく。
- 第5条 本会会員は本会の目的に賛同し、別に定める会費をおさめるものとする。会員は正会員および賛助会員とする。
- 第6条 正会員および賛助会員の会費額は総会で決定される。
- 第7条 本会は評議員会によって運営され、評議員は会員総会により選出される。評議員の任期は2年とするが、再任を妨げない。
- 第8条 評議員会はそのうちから次の役員を選ぶ。これらの役員の任期は2年とするが、再任を妨げない。  
会長 1名 代表幹事 1名 幹事 若干名 会計幹事 1名 監事 2名  
日仏会館フランス事務所所長は、本会の名誉会長に推薦される。会員総会はその他にも若干名の名誉会長・顧問を推薦することができる。
- 第9条 会長は会を代表し、総会の議長となる。代表幹事は幹事と共に会長を補佐して会の事務を司る。会計幹事は会の財政を運営する。監事は会の会計を監査する。
- 第10条 年に一回総会を開く。総会では評議員会の報告を聞き、会の重要問題を審議する。会員は委任状又は通信によって決議に参加することができる。
- 第11条 本会の会計年度は3月1日より2月末日までとする。
- 第12条 この会則は総会の決議により変更することができる。
- 第13条 以上の1条から12条までの規定は、2018年3月18日から発効するものとする。

## STATUTS DE LA SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DES ÉTUDES ORIENTALES

- Art. 1 Il est formé une association qui prend le nom de Société Franco-japonaise des Études Orientales.
- Art. 2 L'objet de la Société est de promouvoir les échanges scientifiques et amicaux entre spécialistes français et japonais des Études Orientales.
- Art. 3 Les moyens employés pour réaliser l'objet de la Société sont entre autres les suivants :
- 1 - Organisation de conférences.
  - 2 - Études et recherches entreprises en commun par des scientifiques français et japonais et publication de leurs résultats.
  - 3 - Développement des échanges de scientifiques entre les deux pays.
  - 4 - Organisation de réunions amicales entre scientifiques français et japonais, notamment à l'occasion des visites des scientifiques français au Japon.
  - 5 - Organisation de groupes de travail spécialisés, pour la poursuite de projets coopératifs franco-japonais.
- Art. 4 Le siège de la Société est établi à l'établissement auquel appartient le trésorier.
- Art. 5 Sont membres de la Société toutes personnes qui approuvent le but de la Société et acquittent la cotisation.  
La Société comprend des membres ordinaires et des donateurs.
- Art. 6 La cotisation pour des membres ordinaires et des membres donateurs est décidée par l'Assemblée Générale.
- Art. 7 La Société est administrée par le Conseil d'Administration. Les membres du Conseil d'Administration sont élus par L'Assemblée Générale. Ils sont élus pour deux ans et sont rééligibles.
- Art. 8 Le Conseil d'Administration élit dans son sein :  
- 1 Président - 1 Secrétaire Général - Plusieurs secrétaires - 1 Trésorier - 2 Auditeurs.  
Les administrateurs ci-dessus sont élus pour deux ans et sont rééligibles. Le Directeur français à la Maison franco-japonaise est statutairement président d'honneur. En outre, l'Assemblée Générale peut élire un ou plusieurs présidents d'honneur et plusieurs conseillers d'honneur.
- Art. 9 Le président représente la Société et préside l'Assemblée Générale. Le secrétaire général assiste le président pour assurer avec les secrétaires les activités de la Société. Le trésorier gère les finances de la Société. Les auditeurs surveillent la comptabilité.
- Art. 10 L'Assemblée Générale se réunit une fois par an pour entendre le compte-rendu du Conseil d'Administration et délibérer sur les problèmes importants. Les membres de la Société peuvent voter par procuration ou par correspondance.
- Art. 11 L'année fiscale de la Société commence le premier mars et prend fin le dernier jour du mois de février.
- Art. 12 Les statuts peuvent être modifiés par décision de l'Assemblée Générale.
- Art. 13 Les dispositions statutaires prévues dans les articles 1 à 12 ci-dessus entreront en vigueur le 18 mars 2018.



目 次

訃 報

|           |       |   |
|-----------|-------|---|
| 興膳宏先生追慕の記 | 木島史雄  | 1 |
| 興膳宏先生を悼む  | 小関武史  | 3 |
| 興膳先生との出会い | 門田眞知子 | 5 |

論 文

|   |      |    |
|---|------|----|
| 日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析                  | 新宮一成 | 11 |
| 『フランス語・チベット語辞典』（1956）に記録される雲南チベット語の性質について | 鈴木博之 | 33 |

学会活動報告

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 2023年度日仏東洋学会総会についてのお知らせ | 49 |
|-------------------------|----|

|             |    |
|-------------|----|
| 日仏東洋学会 会計報告 | 51 |
|-------------|----|

|      |    |
|------|----|
| 編集後記 | 53 |
|------|----|



興膳宏先生追慕の記

木島史雄

興膳先生のご専門は中国中世文学、および文学論であり、中国哲学史を専攻した私は、専攻領域に近いこともあって、先生の講義を受ける機会があった。そして卒業論文で嵇康の「養生論」を扱った際に、試問副査を務めていただいた。私の論文は、まずは拙いものであったから、いろいろご指摘をいただいたに違いないのだが、大方のことは忘れてしまって、僅かに2つのことを現在記憶するのみである。

一つは、「論」だけではなくて、「詩」から思想を読み取ることはできませんかというようなことを仰ったことである。文学専攻の先生であるから当然と言えば当然でもあるが、『文鏡秘府論』などの文学論をめぐる作業と思索を進めておられた時期に当たっていたのかもしれない。調べてみると、『文鏡秘府論』の訳注を筑摩書房から出されたのが、ちょうどそのころである。そして中国哲学史専攻でありながら、「理」とか「気」とかというような形而上的概念操作になじめなかった私には、先生のお言葉は、なにやら救いとも感じられるものであった。思想書を正面から攻略しなくても、いくらでも「思想」は論じうるのだという風に私は解釈して、儀礼作法や学術活動から思想を考えるとという方向に以後、視線を向けることになった。

もう一つは本学会とも深くかかわる。それは試問の際に嵇康詩の読解にフランスの注解書を参照されたことであった。嵇康の詩文を読むにあたって、魯迅輯校本『嵇康集』や戴明揚の『嵇康集校注』が60年代にはすでに出ていた。校訂や出典調べにこれらはまことに行き届いた諸本であり、大いに導きとなった。逆に言えばこれらをちゃんと利用するのに私は汲汲としていた。そんな私に対して先生は、フランスでの研究は大いに参考になります。某某はこんな風に言っています、というようなことを言われた。いきなり西洋人の名前を挙げられて覚えて居ようはずもないのだが、この時挙げられた研究者が Donald Holzman であろうことは、先生の「フランス・シノロジー体験記」（『日仏東洋学会通信』2（1984年）所載。のち『異域の眼』（1995年 筑摩書房）所収）によって知られる（なお Holzman はアメリカ生まれで、パリの高等研

## 興膳宏先生追慕の記

(木島史雄)

究院で活躍した)。先生は 1982 年度に在外研究員としてパリに滞在され、そこで多くの研究者と交流を持たれたのであった。そして敦煌研究と道教研究の進展ぶりに比して「文学研究の分野はやや寂しい」と記したうえで、「詩歌の研究では、D. ホルツマン氏の「嵇康の詩」(*Journal Asiatique* CCLXVIII 1980)などを除けば、あまり目立った論考は認められないようである」と記しておられる。試問の際の発言も、パリでの「フランス・シノロジー体験」に基づいて、その知見と信頼の上での発言なのであった。この文章の中で先生は、「中国文学の研究のために、なぜまたパリへ？」という質問に対して「中国研究者が中国へ行くことの意義を私はもちろん重んずるが、一方またヨーロッパ世界の眼を通して中国や日本を見つめなおすのも、それなりに意義のあることとっていたからだ。そしてその気持ちは、帰国後のいま、いっそう強いものになっている。」と記された。

わが日仏東洋学会の意義を明確に言明した文章と言えよう。そしてその背後に、パリでの体験を踏まえた自信も強く、私は感じる。学恩に対して改めて謝するとともに、わが身の中でそれを活かすべく務めたく思う。

(日仏東洋学会評議員・愛知大学准教授)

興膳宏先生を悼む

小関武史

1993年の春、私は京都大学大学院文学研究科フランス語学フランス文学専攻の博士課程に進学した。中国語学中国文学専攻の教授だった興膳宏先生とは、何の接点もなかった。そのため、仏文の廣田昌義教授から「きみ、中文の興膳先生、知ってる？」と尋ねられたときは、これからどういう展開になるのかまるで見当がつかなかった。廣田先生が伝える興膳先生の話はこうだ。あるフランス人研究者の書いた中国思想の本を翻訳しないかと持ちかけられたが、自分一人では大変だ。中国に興味のある仏文科の学生が手伝ってくるならやってみようと思う——。私はフランス『百科全書』における中国表象を研究テーマとしていて、廣田先生がちょうどよいと私を推薦してくださったのだった。当時の手帳を探し出してみたところ、1993年5月10日の条に「興膳研究室」というメモがあった。このとき、初めてお目にかかったのだろう。

こうして、フランソワ・ジュリアンの『無味礼讃』を興膳先生と私で共訳することになった。興膳先生による「訳者あとがき」にも記されているが、叩き台となる原稿を私が作り、それを興膳先生に吟味していただく形で、作業は進められた。私がフランスに留学したこともあって予定より時間はかかってしまったが、何とかやり遂げることができた。私にとっては初めての出版物で、思い出深い一冊である。

訳文の検討では、興膳先生はしばしば「ここは（漢字ではなく）かなに開きましょう」とおっしゃった。漢字の大家が、漢字ではなくひらがなでの表記を提案されるのだ。自分の知識をひけらかすことなく、読者にとって読みやすいかどうかを第一に考えておられた。まだ若くて背伸びばかりしていた私は、その姿勢から教えられるところが多かった。

余談ながら書き留めておくと、訳注作成の過程で面白い発見があった。ヨーロッパ関係の訳注は私が担当したのだが、著者のジュリアンはフランス語文献の参照指示をあまり記していない。私はパリで裏づけ調査に当たったが、エコール・ノルマルの図書館が開架式で便利だった。何冊か調べているうちに、該当箇所の下線が引かれていたり書き込みがあつたりすることが多いのに気づいた。そう、ジュリアンはノルマル図書館の蔵書を読み込んで、『無味礼讃』の執筆を進めていたのだ。何かのおりに私

興膳宏先生を悼む  
(小関武史)

はその発見を興膳先生に伝えたが、どのような反応を示されたのだったか。私の記憶では、穏やかに笑っておられたような気がするのだが。

それにしても「中国に興味のある仏文科の学生」というのは、いかにもピンポイントの指定である。私の前後にはそういう学生がいなかったし、タイミングがずれていれば私が翻訳に関わることもなかっただろう。不思議な縁を感じる。

日仏東洋学会に私を誘ってくださったのも、興膳先生だった。「中国に興味のある仏文科の学生」は、確かにこの学会の趣旨に合致する。そして、仏文科ではないさまざまな領域において東洋とフランスに接点があることを、私はこの学会に入って知ることができた。興膳先生の導きのおかげで、新しい世界が開かれたのだ。東洋学に原点があり、そこからフランスに関わりができた方が、この学会には多い。私の務めは、フランスを出発点としている研究者の目を東洋学に向けさせることだろう。そのために尽力することが、興膳先生の学恩に報いることになると思っている。

(日仏東洋学会幹事・一橋大学教授)

興膳先生との出逢い

門田眞知子

興膳宏先生に初めてお目にかかったのは、1995-6年頃だったと思います。

元京大人文研所長の故尾崎雄二郎先生から、フランス語の堪能な中国文学者で詩がご専門で、と私の仕事を知りご紹介下さり、文学部の薄暗い大きな研究室の扉をノックしたのです。お待ち下さっていた先生は、部屋の雰囲気とは対照的に物腰のソフトな丁寧なお話をなさる教授という第一印象を抱きました。

当時私はパリ IV・Sorbonne 大学で学位論文を書き終え(1990年2月)、クローデルと極東のテーマの延長にクローデルが中国詩の翻案詩に興味を抱いていたことから、欧米の中国詩や唐詩の移入とその変遷を調査していました。クローデル自身、中国に赴任する前に J. ゴーチエの『玉書』(*Le Livre de jade*)を手にし、それは数多ある彼の蔵書の一冊として今もパリのクローデル協会に保管されています。

拙論「ヨーロッパ文化圏への中国詩の移入：I. その小史」を、1996年4月に鳥取大学の紀要に載せその抜刷はいま手元にあります。注の最後には興膳先生のお書きになられた『異域の眼-中国文化散策』(筑摩書房 1995年)を引用させて頂いています。P. ドミエヴィルがフランスの傾向を論じて、「二十世紀前半の大家たちは、総じて文学への関心が薄かった。(・・・)グラネが『詩経』に惹かれたのは、社会的な価値からであった。」(「ドミエヴィル小伝」)ですので、この少し前にお目にかかりお話を伺い御高書を頂いていたのだとあらためて記憶を辿っています。

興膳先生からはその後もご執筆になられた御本をお送り頂きました。

『風呂で読む陶淵明』や荘子に関するご高著も含めて。中でも岩波新書の『漢語日ごよみ暦』は読んで楽しく日常生活の中に溶け込んだ漢語表現が日めくり式にあらためてその意味を輝かせ読む側に閃きを与えてくれます。中国やフランスの日暦を手にしてヒントを得て漢語日暦を作成されたようですが、その始まりは京都新聞に日々載せられていた記事であったようです。各項目に興膳先生の特に中国詩への造詣の深さが滲み出ています。例えば4月の今、29日には「躑躅てきちよく」と題して「ツツジが花盛りだ。(・・・)唐の詩人では、白居易が大のツツジ好きで、その親しみやすさを愛し、

興膳先生との出逢い  
(門田眞知子)

庭にも植えて楽しんだ。」と語られています。そんなことまでご存じなの、と読者は感心してしまいます。

ただ興膳先生の最後の杜甫詩注はお送り頂けなかった。

過日京都大学百周年時計台記念館2階国際交流ホールで行われた「興膳先生お別れの会」(2024年3月20日)ではお弟子さんを中心にゆかりある方々の追悼文集が配布された。その中で木津祐子先生は、興膳先生が最後までどんな苦労も押しのけてまさに命を賭けて杜甫に取り組んでいられたと話されていました。お弟子さんたちの協力がどれほど最晩年の先生には不可欠で励ましとエネルギーを与えていたか。年一度の御賀状の最後の年には、命がどこまで続くか分からないという言葉と杜甫詩注を仕上げたいという強い願いが認められていました。木津先生を始めとして有能なお弟子さんたちが「完走までに」も少しの興膳先生の残されていたお仕事を完遂なされることを信じています。

興膳先生から送られてくる御本に私はお礼状はすぐに書くものの肝心の本の中身への感想はすべてには送っていなかったように思う。なんと多くの宝物を前にして大胆不敵な怠け者であったことか。手元にあるのは、おそらく先生が最晩年近くにお送り下さった『虞美人草』28号である。コロナ禍の下、オリンピックが開催されたことの驚きがユーモアも交えて語られている。中に「わたしはどちらかといえば、パラリンピックの様々な場面に強く印象付けられた。走り幅跳びで、義足の選手が全力で疾走しては、徐々に飛距離を伸ばしてゆく姿が思い浮かぶ。」先生の弱者への *sympathie* というか暖かなまなざしを他の機会にも感じたことがあった。

連続の引越で今も見つからないが、確か同じ雑誌の別の号に吉川幸次郎先生との出逢いも書いておられたと思う。手元に残る『異域の眼』には7年先輩で早く亡くなった高橋和巳氏への追憶やこの時点では<未発表>と記された「吉川幸次郎先生の人と学問」と題する文章を載せておられる。

「私が京都大学に入ったのは昭和三十二年、一九五七年ですが、そのころ、吉川先生は文学部長をしておられました。入学式とか大学の公式の行事でなざる挨拶をうかがったのが、吉川先生のお話を聞いた最初です。」で始まっている。高3の時、病気で二年間療養生活を送らざるを得なかった。そして京大に合格した時は「天にも上る嬉しさでした」。

宇治分校で最初の一年は学び、陸の孤島に「吉川先生が来て講演をなさった」。それは杜甫の詩についてであり、杜甫の<倦夜>であった。「重露 涓滴を成し、稀星 乍ちに有無」と空の星が光ったり消えたり的情景の詩を吉川先生は詳しく説明され

た。この日は「たまたま私の誕生日でした。(・・・)吉川先生の話聞いて、それじゃ中国文学にしようかという気になりました。その意味で、私にとっては重要な日でした。」杜甫の詩と共に。

同書所収の「吉川幸次郎『杜甫詩注』私語」ともども吉川幸次郎先生への限りない敬愛の念が綴られている。

拙論に戻ると、その抜き刷りには James Legge や Arthur Waley や Marcel Granet を始めとする欧米の中国文学者や中国詩訳者を時代を追って採り上げた。英訳の方がフランス語訳より早かったよう。早くにはイタリア人宣教師のマテオ・リッチなどが明代の中国に長く滞在し『四書』のラテン語訳を行ったりしている。IIには<中国詩訳の黎明期-「詩経」の翻訳>と題して、ヨーロッパでは中国詩と言えば李太白や杜甫や王維ではなく、長く「聖典」として古代詩集の『詩経』であったこと。この紹介はフランスの方が早かったようだ。中国詩の普及には宣教師の力が大きかったこと。宣教師レグは後に Oxford 大学の初代中国学講座の教授に就く。彼は「詩経」も訳した。クローデルが J. Legge の『老子道德経』の英訳を読みいわゆる「空無の思想」に影響を受けたのは有名なことである。そして中国人の家庭教師 Tin-Tun-Ling の助けを借りて中国詩を翻案した Judith Gautier の『玉書』(初版は『白玉詩書』1867年)に魅せられ、翻案詩集であったがクローデルの愛読書の一冊であったこと。ジュディットの *Le Livre de Jade* はベームにドイツ語訳され、さらにハイルマンが翻案詩訳し、1907年にはベトケがジュディットとサンドウニ、さらにハイルマン訳の翻案詩集として『中国の笛』を出した。それを見たオーストリアの作曲家、グスタフ・マーラーが『大地の歌』の歌曲第三楽章<青春について>(Von der Jugend)にも採り入れ、影響力は大きかったことなど。その一詩、Judith の李白の<Le Pavillon de porcelaine>(陶器のあずま舎)との関連を巡ってはすでに吉川幸次郎先生も原詩などに言及なさっていた。

クローデルはこの作品ともう一つ、中国人の曾仲鳴というかつてフランスのリヨンに留学し若くして暗殺された人物の *Cent Quatrains des Tang* 『唐人絶句百首』という訳詩をクローデル自身短詩に翻案し<Petits Poèmes d'après le Chinois>として載せている。彼が外交官を引退してリヨン近くの Brangues 城に落ち着いてからの作品で楽しんで作ったようだ。彼が見た書物は現存しない。出典も明記されていず一種、謎の多い作品でこれまで全体を解説した研究者はいなかったことから私はそれをリサーチしてみたいと思ったのであった。幸い3年の科研費も得た。1998年にはこのリサーチのために日本学術振興会からフランスの Collège de France の特定国派遣研究者として出かけた。Drège 教授及び Despeux 教授に招かれ INALCO でもお話しする機会が

興膳先生との出逢い  
(門田眞知子)

あった。パリ IV 大でお世話になった今は亡き François Crouzet 教授の推薦でオックスフォード大学中国学研究所の G. Dudbridge 教授に招かれ、やはり日本学術振興会の特定国派遣研究者としてひと月足らず Oxford に滞在する機会も得た。興膳先生にお目にかかった頃は、幸い私は活動的に仕事をしている時期でもあった。

興膳先生は、そのあと文学部長、大学院研究科長となられ、同年福井文雅先生を継いで日仏東洋学会の会長となられた(1998年)。2000年に定年退官なさり、京都ロイヤルホテルで退官記念の会が催され私もお呼び下さった。そのあと京都国立博物館長となられた次第である。

そのような時期に、フランス語の堪能な中国詩学の権威である興膳宏先生に迎えられご縁を得て私は幸運であった。京大文学部中国文学会や東方学会への入会をお誘い下さいました。嬉しく入会致しました。本来ならそれぞれの学会で学会誌に発表することをご期待下さったかもしれません。怠惰な私は興膳先生のご厚意にどれだけ応えることが出来たか。

それでも1998年の日仏東洋学会では、東一条の京大会館で「ポール・クローデルと曾仲鳴」の講演をさせて頂き、そのまま学会入会もお勧め頂き会員となりました。1999年3月に発行された「通信」no.23には、会長就任のお言葉を興膳先生はお書きになられ、私の短い講演趣旨が「ポール・クローデル Paul Claudel と二種類の〈中国詩〉翻案詩」と題して掲載されています。そして、二度にわたって鳥大で学会開催もお勧め下さった。一度目の1999年3月には、チベット仏教がご専門で現在日本学士院会員の御牧克己先生がご厚意で講演下さり、「インド・中国・チベット仏教の瞑想階梯 禅の十牛図と〈チベット牧象図〉」と題して「禅の十牛図」との類似性など大変興味深いテーマでお話し下さった。(「通信」nos 24-25号に所収「〈チベット牧象図〉再考」。2001年3月)この講演には摩尼寺の僧侶も山から下りてこられ御牧先生のお話に耳を傾けられた。私たちもそのあと摩尼寺に見学した。まだ雪深かったように記憶する。私は交通費など会員の方々の自己負担をすまなく思ったが、その時興膳先生は「俸給はそのために頂いている」と言われたのが印象的だった。また京都からスーパー白兔で来られたが、帰りは少し安いからと高速バスをお勧めした。後日、列車の方が景色がよかったとの感想を述べられた。悪いことをしてしまったと悔いました。

二度目は当時地域学部教授として、古事記の「因幡の白兔」神話の1300年記念年を明けての2013年(平成24年度)3月31日(日)に鳥大で日仏東洋学会が開催された。「外と内から観た古事記の因幡の白兔神話」の私の拙い話に耳を傾けて頂きました。鳥取西高ご出身の木島先生も「Sugerius と歐陽詢」をお話し下さいました。懇

## 訃報

親会がかぶら亭で現地の御魚やお酒を楽しまれた。私の退官の年でもあった。

自身の欧米の中国詩調査はもう少し時間をかけて取り組むべきところ、調査半ばで文部省（当時）の出版助成金の誘いが来てもう一年延ばせばよかったのに通ってしまい、急ぎ出して後で雑誌『しにか』などに紹介され、中国に行かなかったシノログを出かけたと書くようなミスをしてしまった。その時興膳先生からははっきりしないことは、聞いてください、と叱られたことを覚えている。それが『クローデルと中国詩の世界—ジュディット・ゴーチエの『玉書』などとの比較』（多賀出版 1998年2月）である。ミスは犯したものの、クローデルの中国詩の影響は専門家の視点からのコメントが頂きたく、興膳先生



興膳宏先生お別れの会にて

をお願いした。ご多忙な先生なのに快くお引き受け下さった。それは「興膳宏教授年譜略<再訂>」の1999年3月「書評」*L'Oiseau Noir* X 日本クローデル研究会（のち『現代』所収）として載る。

最後に。これはあらためて興膳先生に言い訳をして終えねばならなかったことである。2013-4年ごろでしたか。興膳先生が Jean-Pierre DIENY, Collège de France 教授の *Les Poèmes de CAO CAO* (Collège de France 2000年) と題する本を送ってこられた。先にはコピーであったのが本が届いたと本も送ってこられた。そして面白いでしょ、急いで訳していただきたい、直訳でいいです、後は私がしますからと言われた。急いでおられるというのは伝わってきた。しかし私はほぼ同時に4百ページある、Dominique BONA 著の *Camille et Paul Claudel* を訳し始めたばかりでとても専門でもないのに荷が重いと感じたし、直訳を先生にお送りするわけにはいかない。一応やりますと言いながらも進まなかった。二度ほど興膳先生は急いで、といった表現を使われてご連絡を頂いた気がする。グスグズする私に先生はあきらめ顔だったかもしれない。或る日、私が遅くて送れなくて申し訳ありませんとご連絡した。返ってきたのは、もういいのです、ディエニ教授はお亡くなりになりましたから。そうだったのか。ディエニ先生はご療養中でお亡くなりになられたのだ。御存命中に日本語で翻訳本ができましたよ、と友人に喜んで貰いたい一心だったのだと分かった。4百ページ

興膳先生との出逢い  
(門田眞知子)

の本の拙訳は藤原書店で今本文の見直しに入っている。時間を要した。せめてこれを出すことが興膳先生に対する *excuses* とならんことを。

お別れ会では興膳先生のユーモア心を語られる先生もいらした。京都国立博物館館長職が暇で、「きゅうかんちょう」と自ら言われたとか。先生の落語も一度聞いてみたかった。修行僧のように真剣にお仕事に取り組みれると同時にユーモアの心もおあり、お花の一笔箋でお便りを下さった興膳先生。私には終始優しく心の暖かな研究者であり師でありました。

興膳先生、これまで沢山の学恩を賜り誠に有難うございました。

*Je vous fais toutes mes excuses. Et reposez-vous.*

(日仏東洋学会評議員・鳥取大学名誉教授・講師)

# 日本の神話的アイデンティティと フランスの精神分析

新宮一成

本日は日仏東洋学会でお話しする機会を与えてくださりたいへん有り難うございます。「自省利他」の科研費研究をきっかけに、この会に導いてくださった中谷英明先生に感謝いたします。

## I. 神話で語られるアイデンティティとフランスの精神分析

### 1. 第二の誕生日

本日の私のお話は、フランスの精神分析を通して日本人のアイデンティティを考えてみる、という内容です。フランスの精神分析は、精神分析である以上はもちろんフロイトを基礎にしているのですが、ジャック・ラカンによる刷新を経て、レヴィーストロースの構造主義を大幅に取り入れたものになっています。レヴィーストロースの構造主義はその神話分析の方法や親族構造の分析によく表れていますが、レヴィーストロースはいち早くフロイトの知見を消化吸収していましたから、彼の構造主義を精神分析に取り入れることは、精神分析にとっては一種の逆輸入であるとラカンは認識していました。フロイトのエディプスコンプレクスという概念は広く知られていますが、レヴィーストロースも神話の構造分析にあたり同じくエディプス神話を参照していたのです。人間は人間自身の発生の起源を考えるにあたって、どのようにしても折り合うことのできない両極を折り合わせる論理を見つけようとしながら、自己認識の変容の旅をしてゆきます。構造主義のこの基本見地を、ラカンも共有することになりました。フロイトは、小さい子どもが、人間はどこからきたのかと考えることによって、早期に構造論的な疑問に入り込んでゆくものだと捉えていました。ちなみにこの折り合うことの不可能な二項対立の両極という考え方は、陰陽の二極を動的に組み合わせた太極図を思い出させます。人間が人間自身を考えるという自己言及の構造は、

日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析  
(新宮一成)

主体が対象を客観的に観察するときは隠れていますが、その対象が自分自身ということになると、途端に人間に対して、不足や過剰などの不安定さを、意識に突きつけてきます。人は人から出るか、それともキャベツのように土から出るか、と考え始めて、小さい子どもも、レヴィーストロースが考察する神話の主体も、迷いに捉われます。

アイデンティティと言われるものも、自己認識の一種ですから、当然のことながらそうした不安定さを免れず、それゆえに人は自然的発達に助けられながら、また社会的環境に急かされながら、この自己認識を解決するというよりも、流動的に変容させていくこととなります。この概念をはじめに広めたエリクソンの着想においても、アイデンティティは、信頼と不信の二極から始まって、なかなか自分の中で和解のできない葛藤的な状況を、成長に連れて次々と異なるレベルで辿ってゆくものとされています。いちおう再生産、あるいは生殖の時期には、その生産という統合的な行為が、いったん何らかの安定を導くかのように捉えられなくもありません。

しかしラカンの場合は、エリクソンが与えたこのイメージとはかなり異なります。ラカンには、いわば「第二の誕生日」という発想があります。言葉によって文化的平面に生まれることが、意識的存在として人間が掴みうる自分らしさの遡行限界であり、それ以前の実質的な誕生というものは、人は本質的に隔てられているということです。そして仕方なく、その実質的な誕生を、神話的に設定するのが人の性さがだということになります。誕生があったのですからそれ以前の実質もなかったわけではないのですが、それ自体を想起することはできません。それゆえ人は自己の来し方について神話を用いることになるのです。

この意味で、神話は決定的な重要性を帯びます。「私は大阪で生まれました」と私が気軽に言う時には、「生まれました」は自動詞の過去形ですが、それを事実問題として観れば、「生まれました」は、私が誰かによって生み出されたという、他動詞の受動態の過去形です。他動詞の過去形のほうは、隠されています。私は、その事実を自分で見たわけではありませんから、その事実性の保証はできません。それゆえ、私は「私は大阪で生まれました」と発話することで、すでに一つの神話を語っていると言えます。仮想の実質的な私を主人公とした神話です。この自分がラカンの言う「第二の誕生日」に誕生したのだという神話を語ることによって、私たちは第二の誕生日を持ち、それぞれ、私という言葉語る根拠をも得るのです。言葉を語るこの私によって、肉体的な私は、神話にくるまれてもう一度生み出され、この誕生を踏まえて、神話の言葉を語る私がアイデンティティを備えるに至ると言ってよいかと思えます。

## 2. 夢と神話の中のアイデンティティ

ところが、親から受動的に「生まれた」私というものは、親はともかく、私自身はその真実を知りません。しかしながら、親が死んだあとでも、人はその生まれの真実を正しく知っているはずであると期待されています。そうでなければ私のアイデンティティは暗闇に閉ざされてしまいますから。

そのように期待されているおかげで、私は「どこかで」生まれたという前提を崩さずにいることができます。固有名詞の地名を用いて語られるその「どこか」は、しかし、私自身にとっては知っているようで知らない場所です。生まれた日のその場所の景色など、覚えていません。こういう意味での生まれの場所が、それぞれの人の中で、それでも確かなイメージを与えているのはどのようにしてなのでしょう？ 実は私たちは、知らず知らずのうちに、水辺で生まれたという感覚的な確信に染まっているのではないかと、私はひそかに思っています。水辺の場面は夢の中に非常にしばしば現れてくるので、夢を見るからには、水辺を夢の中で見たことがない人はほとんどいないと思えるほどです。

「自分が生まれた場所」はアイデンティティの構成要素の一つであるはずですが、その「生まれた場所」の夢象徴が「水辺の場面」なのです。夢象徴は、本人は、見た時にはその意味に意外に気づかないことが多いのですが、フロイト的にまとめると「水に入る、あるいは水から出る」ということは、出産ないし分娩の夢象徴です。このように多くの人が見たことがあって象徴的意味のある夢を「類型夢」と呼びます。さらに、象徴としては、夢の中だけでなく、絵画、民話、文学などでも、水辺が出産の場所として捉えられている例が多くみられます。有名な『ヴィーナスの誕生』の絵、そして桃太郎や一寸法師の民話は、海や川が舞台で、主人公は水から出てきます。そして、文学では、民俗学者でもある折口信夫が、釈道空の名で『海やまのあひだ』という歌集を出版していますが、この本には、自分自身が愛する海辺の漁師村の風景の歌から始まり、生まれ故郷の海に近い街への屈折した感情に至るまでが、濃密に描出されていて、まさに心のアイデンティティが水辺にあることが描かれています。

そして精神分析では、フロイトに続いてジャック・ラカンが、より鮮明に、「自分の生まれた場所」、つまり主体の故郷は水辺であるという象徴論を打ち出しています。使われているフランス語は、「リトル (littoral)」です。辞書的には「沿岸地帯」と訳されています。ラカンがこれを選んだのは、フランス語の *littéral*、*littérature*、*lettre*、英語の *letter*、*litter*、さらにはラテン語の *litura* (汚点) などとの語呂合わせに用いるためです。海辺の水と陸の間には、物理的には液体と固体を隔てる境界線しかなくて、

日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析  
(新宮一成)

その線は単に異なるものの接する境であって、それ自体で積極的に存在しているものではありませんが、その代わりここにはいろいろな漂着物が到来して、それらは実在します。すなわち、海と山の間には、海岸線しかないけれども、それは実は来歴を無言のうちに語る「文字」となって現れて、その「文字」はやがて文章となって、話す主体を表すようになるということなのです。一方では漂着物はごみのようなもの、すなわち *litura* とか *litter* であって、それ自体から意味が消されているのと同様、現れた主体には存在の意味はまだありません。人がそれに文字的な、つまり呼ばれたり読まれたりする存在であるという意味づけをすることで、初めて主体は名づけを得て存在の意味を獲得します。こうして主体の第二の誕生が、水辺において実現するというわけです。ちょうど海辺に流れ着いた流木が、アートとして加工されて第二の生活をできるようになるのと似ているとも言えます。それゆえ、ラカンは、漂着物として生まれ来る水辺の文学を、文学の祖型として、「リテラチュール」ならぬ「リチュラテール (*lituraterre*)」と名付けたのです。

こうして言語的で社会的な主体というものは、存在の社会的意味の自覚を獲得する時には、どこかで発生していた無名の生命を、水辺で象徴的・文字的に拾い直して、自分のアイデンティティを作ると表現できます。そしてやがて、貝殻を拾う海辺であれ、村人が洗濯するような川辺であれ、拾われたその場所がアイデンティティの場所になります。その象徴的場面の夢を見たり、絵を見たり話を聞いたりするとき、その都度、人々は自分自身を確認しなおす心的作業をしている、ということが、心理的には言えると思います。

オットー・ランクというフロイトの弟子がいて、彼は『英雄の誕生』という本を書いて、この「水からの誕生」の夢象徴を強調しました。その後ラカンは、誕生する主体を英雄に限らず、すべての人が文字的に自らを規定することによる二度目の誕生を経験するという、言語的水準、社会的水準での主体の発生を強調したということになるでしょう。こうして水辺の存在に意味づけをすることによって創られた人の主体性は、ラカンの言葉を使ってリトラルな、つまり「波打ち際の」アイデンティティと呼ぶことができるかと思われまます。

そして、日本神話を繙いてみますと、さきほどの釈道空の『海やまのあひだ』という表題にも暗示されていることですが、日本人のアイデンティティはともこの波打ち際のアイデンティティに強く彩られているように思われます。というのも、日本神話の神代記には、神武天皇の父が、海神族と天神族の婚姻によって「渚」で生まれたということが記されています。ちょうど昔の唱歌の「我は海の子」の歌詞に謳われてい

るのとよく似た生まれです。そして、よく読んでみると、天神族の父が陸に居るところに、海神族の母が追いかけてきて、妊娠をしましたからこの渚で産みますと宣言をして、産むのです。しかしそのお産中の姿が鰐になっているところを父が見てしまったので、母は海に帰ってしまいます。先の釈道空、つまり折口信夫も書いていますように、これは日本の異種婚姻譚の一つのパターンでもあるのですが、これを読んで私は、母の動きが、陸に打ち寄せる波の動きにそっくりだと感じます。「寄せては返す波」と申しますが、陸に打ち寄せて、陸との関係ができたとたんに、波はまた、何の関係もなかったかのように海に帰っていきます。

このように、ふた親の関係がはかなくて、生まれた子どものアイデンティティもどこかしっかりしないままなのが、波打ち際のアイデンティティの特徴と言っていると思います。この神話に表されているように、海と陸の間には、関係というものがなく、本来無関係な両者は、人間によって、生殖という隠喩で関係づけられるのです。その両性関係からアイデンティティが生じたということにしなければならない人間は、和解不能な海と陸を、無理にでも関係させて、その無理を承知で、鰐と神人の間で子孫を作り、その子孫にアイデンティティを持たせます。海幸彦と山幸彦は、現実の山が海に川を流れ込ませて、豊饒な渚を形成しているという生態学的事実に目もくれず、ひたすらいがみ合い、戦います。海という記号と山という記号には、和解不可能な二項対立という関係しかありません。一方では、この二項対立によってこそ、解決できない問題が先送りされて、次の二項対立にまでもたらされ、改めてそこで解決が試みられる、という無限の発展可能性が与えられます。レヴィーストローによるフランス構造主義は、このような神話的二項対立の言語的自動運動によって、人の社会関係の物語的な過剰がもたらされたと想定します。

### 3. 漢字と日本人アイデンティティ

ラカンの精神分析は、その発展の元々の神話的な構造を強調し、和解不能な対立によってもたらされる心の動きこそ、無意識の運動法則、つまり思考や表象が動いてゆくときの知られざる道筋であるとしました。この点から見ても、日本人の言語活動は、波打ち際のアイデンティティを反映していると思われます。つまり日本人が漢字を使って書き始めた文学的伝統は、海と陸との終わりのないせめぎ合いのような運動を繰り返しながら続く、一つのアイデンティティを保っています。

海と陸の間という地理的に見える構造概念は、「そこが主体誕生の場である」という観念を伴っていることが特徴であることを、上に見ましたが、日本人の言語活動に

日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析  
(新宮一成)

おける「漢字」という構成要素も、やはりこの主体誕生の場という特性を帯びています。というのは、人の名前が多くは漢字表記されますし、漢字自体を表す漢字である「字」という意味の字は、「屋根の下に子どもが居る」という姿をしています。これは、「字」という地理的用法の意味内容にもつながることです。人がそこで再生産をして集団を成し始めたという地理的アイデンティティを「字」が含意しています。

そしてもう一つ、文字の生まれる構造的故郷である境界的性質のほうも、漢字にははっきりと備わっています。それは、漢字がちょうど、中国と日本の境界に置かれた文字だということです。今は日本人としての立場から考えますので、韓国など多かれ少なかれ漢字文化圏にある国々のことは考察に入れることができないことをお許しください。日本人にとって、国家規模の文化は、中国から海を越えてやってくるものでした。陸にしか住むことのできない人間は、海の底に住んでいると想像された鱈族との間で、海岸線において字を描いて、そこに主体という子を成すことになりました。先ほどの神話の言うようにここが日本人の誕生地であるとすれば、中国の文化と列島の人間との間で、言語的な、ひいては文学的な主体が生まれたのがここであり、生まれたのは漢字に担われた主体です。漢字は、中国語の音と日本語の音をカバーしています。一つの字が、二つの言語に跨って存在します。この字で表される列島の主体が作る文化国家も、微妙な股裂き状態で存続することになるでしょう。書家ならではの感覚で石川九楊氏が言う「二重言語国家」として、日本が誕生することになります。

もちろん、広大な大陸に広がる中国を、海洋のどこかにある領域として思い描くことには、何らかの逆説感が伴いますが、そのことは、「常世」という言葉を中国のどこかと重ねることによって、解決されるでしょう。「この神風の伊勢国は、則ち常世の浪のしき波よする国なり。かたくにのうまし国なり。この国に居らむとおもふ」と語ったのは、天照大神です。これは垂仁天皇の条に書かれていますが、同じく垂仁天皇の条には、常世の果物（「ときじくのかくのみ」）がもたらされる話があって、そこで言われている「常世」は、列島からの行程の説明から、容易に中国のどこかの奥地を想像させます。天照大神の言う浪が寄せてくる「常世」と、「ときじくのかくのみ」の成る「常世」とは、同じ常世であっていけないはずはないでしょう。

こうして、漢字の中で、大陸の音声と列島の音声が同居している音訓二重状態こそが、日本人の文化的アイデンティティなのです。リトラルな波打ち際のアイデンティティです。私たちの日常生活を振り返ってみますと、同音異義語で交流している時間が異様に長い。これは漢字の関与によるところが多いことは言うまでもありません。音声言語によって交流している時、私たちは話したり聴いたりしながら、漢字が音の

意味を確定しに来てくれるのを待ち受ける準備態勢に素早く入っておいてから交流します。

こういう状態を外国人であるラカンから見てそして聞くと、「日本人とは、母国語の中で中国語を話す民族である」ということになりました。あるいは、日本人は、自分が話したり聴いたりする言語を、中国の字に解釈してもらっている、という風に映りました。御存じのように、フランス人にとって、「中国語を話す (parler chinois)」は、俗語レベルでは「訳の分からないことを言う」という意味にもなりますから、日本人というのは、互いに分からないことを言い合っているくせに、互いに分かり合ったことにしてしまうことのできる言語装置を持っている、という皮肉にもなります。ラカンは、この皮肉を昂じさせて、日本人は精神分析を必要としていない、と言いました。

ラカンの側のいら立ちも感じさせるこの発言には、根拠がないわけではありません。精神分析が成り立つ前提は、人間の心には、自分自身にも分からない無意識と呼ばれる働きがあって、それを理解することが難しいために心を病むことがあるということです。ラカンにとっては、人が存在するということと人が意味の意識をもって生きることとは、根本においては相互に疎外関係にあります。この両者がうまく同心円状に重なって中心に主体がしっかり据えられているのであれば、無意識は生じなかったでしょう。心が病的になることもなかったでしょう。もし話す主体が中心にない無意識の言語と、話す主体が前提される日常の言語とを一挙に理解できる道具があったら、それを操れる人は、心の病気に罹らず、世が世ならシャーマンとして社会に受け入れられるかもしれません。そしてラカンからは、日本人は皆が漢字を使ってそのようにできるはずだということになっていると思われたのです。日本人の無意識には、漢字を使わないと解けないとされている謎が溜まっているのです。そしてアマテラスの言葉さえも、漢字という外国製のフィルターを使って書かれました。すなわち、二千年近く前の言語世界を、漢字という外国文字を使って、自分の国の様子として打ち眺めているのです。漢字の音読みによって疎外されつつ、漢字の訓読みによって疎外を贖<sup>あがな</sup>っているのです。

先ほど、ラカンにとって、第二の主体の誕生日は言語の平面に生まれた日だと申しました。それは同時に、太古の自分が、言語の中に疎外されることです。無言の、ないしは喃語しか発さなかった自分は、言語の中へと潜り込んで生活からは疎外されてしまっているのです。そういう自分に近づき、取り戻すためには、夢や言い間違いや症状を用いなければなりません。この作業を通じて、太古の自分と繋がったアイデンティ

日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析  
(新宮一成)

ティが確認されます。たしかにさらにそこに漢字の使用を加えれば、疎外はさらに取り戻しやすくなるかもしれません。けれどもラカンと違って、漢字使用の当事者である日本人は、漢字を使う故の心的困難も知っているし、また漢字の力の及ばないところから、世界共通の各種の症状も数々やってきます。それらに対応するためのアイデンティティの取り戻しに、精神分析が役に立たないわけではありません。

実際、日本の精神科医療での精神分析的な治療の間に、その人のアイデンティティが成熟へのきっかけを掴むということはたびたびあることです。そしてそのような精神分析的治療にあたっては、夢がその役割を果たして、神話への通路を開きます。

そうした例を、次節でご紹介します。

## II. 夢の中の波打ち際から生まれるアイデンティティ

### 1. 波打ち際の死体としての自分

アイデンティティといえば、地域や民族のアイデンティティという使い方もありますから、そうした意味では神話が問題になってくることは当然のこととして捉えられると思います。その地域で育つてくると、まわりの人々の語らいに応じて、成長のうちに神話的な要素が繰り返し幼年の頭脳に流れ込んでくると思われます。先ほどの、水から出たり水に入ったりする夢の場面が分娩の象徴であるといった、数多くの象徴機能を弟子と共に列挙したフロイトも、これほど多くの象徴が夢で産出されるのは驚くべきことであるという感想を漏らしていますが、今でもその不思議さがすっかり解明されたわけではありません。しかし、多くの人々が話すのを耳から取り入れた幼児にとって、そこからある種の絵文字のように象徴を形成することはそれほど困難ではないのかもしれません。

次の夢には、前節で論じた波打ち際の場面がきれいに出現します。ある優秀な女性が、自分自身が何者であるのかを創り上げて行く時期にあたり見た夢です。

子どもの誘拐事件。海岸の岩に死体がひっかかっている。ロープと、その子の崩れ落ちた骨と、それだけ真新しいような、B6 くらいの手帳がある。その手帳は、両親によると、子どもの持ち物だった。

私は音楽用のスタジオに連れていかれる。それは、ある詩人が、アメリカの場末の娼婦から摩天楼の夜までを 260 いくつかの短い詩にして「汀」という題をつけ、しかもそれを発表せずに死んだのを、細野晴臣と誰かが、

## 論 文

刊行したということが一部で話題になり、何回も取り上げられたことに  
関係している。「汀」の装丁は、にじみ文字の27色重ねで、表紙に大きく  
「汀」の字が2つ書いてある。私は音楽を聴く実験をされて、頭に取り付  
けられた端子は、モニターに繋がっていて、その画面では白い点が動いて  
いた。

無意識では、人の神経回路に刻み込まれている記憶表象が、いつも行き来してしま  
すが、夢では、それらの組み合わせが図像の形をとって万華鏡のように目に見えてきま  
す。この夢では、その中で、これまで触れてきたのと同じ、「海岸」や「汀」という  
「波打ち際」を舞台とする像や、「手帳」「にじみ文字」「『汀』の字」「画面に動く点」  
という「文字」が出てきていることが目立ちます。また、夢は前半と後半に分かれて  
いますが、「人が波打ち際に死んでいる」ということが大きな共通項目ですので、場  
面が変わったからといって、筋書きが一変した訳ではないことは明らかです。

夢の主人公は前後どちらの場面でも死んでおり、また、その死の舞台はどちらもや  
はり波打ち際なので、主人公が波打ち際において死を経験するということが前半後半  
を通じて持続する主題であると考えられます。ではその後どのようになって  
いくかを見てみると、後の場面での詩人は、死んで詩集を残していて、その詩集は、  
音楽家たちの手で出版されることになっています。

この二つの場面では、どちらも、死んだ人に本のようなものが付いています。前の  
場面では「手帳」で、後の場面では「詩集」です。これらの本のようなものにはむろ  
ん「字」が含まれているでしょう。後の場面では、その字が、はっきりと夢の中に浮  
かび上がってきています。「汀」という題字です。この二つは、共に、死んだ人の命  
の活動の、字による記録であるわけですから、一つの命が去って、別の命、つまり文  
学的な言葉の生命が、本として生まれていることを表していると言えるでしょう。

また、後の場面では、亡くなった詩人の詩集の出版のための作業場に、生きて夢を  
見ている人自身が連れて来られているのですから、この出版に夢見る人が深く関りをも  
っていることが分かります。そしてその夢見る人の脳の活動は脳波計のようなもの  
で導出され、モニターに軌跡が書かれつつあります。この場面では、いわば夢見る人  
自身が、自分の夢の中に侵入して行っているのですが、その分、しっかり夢の筋書き  
を担ってもいます。つまり、死んだ状態の人がすでに2人出てきていたわけですが、  
3番目に登場した夢見る人自身が、生きている状態で、何か「文字」に似たものを、画  
面の上に描き出し始めているわけです。これは、夢の中で、自分が夢見ている状態そ  
のものを表象する、ということが起きているとみなせます。夢の中で「これは夢だ」

日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析  
(新宮一成)

と気づくことはよくありますが、そのような夢の機能を、具体的に情景化した場面だと言えましょう。

すなわち、夢見る人は、夢全体においての大きな主人公の機能を、担っているのです。前の夢場面に出てきている海岸で骨だけになっていた子どもは、まだ話せない幼い自分で、生命そのものとしての自己存在なのですが、後の夢場面の中で、言語を操る自己存在として生まれ変わって、アメリカの汀で詩人となって活躍して、『汀』という作品を未刊のままに残して死にます。そしてその未刊の原稿を表に出す仕事を担っているのが、夢を見ている彼女自身です。

波打ち際を舞台にした夢は、前述のように誕生を語っていることがほとんどなのですが、この夢ではさらに、ラカンの言う「第二の誕生日」つまり、話せない自分を越えて、言語活動を操ることで主体になった存在の誕生が、語られています。その誕生に苦勞がないわけではありません。第二の誕生日というのは、自然にカレンダー通りに訪れるものではなく、いったんは疎外されてしまった自分の存在を、それが死体のように感じられているにも関わらずどうかして取り戻し、そしてそれと一体になった上で、生まれ直す日だということを、私たちはこのような夢から教えられます。漢字の存在は、言語のために疎外された自分と、今の話す自分との間の時間の差を橋渡ししてくれはするのですが、漢字を使うにあたって、さらに水と陸、また死と生の二項対立を橋渡しすることになることが夢から分かります。漢字は言語主体にとって決定的に頼れるたつきとなっているのです。

日本人には精神分析は不要だと言っていたラカンの言は、事実にではなく、安易に異文化のデバイスに飛びつくことへの警鐘、さらには一種の逆説的な激励であると受け取ってよいと思われる。心の中で深められてゆくアイデンティティというのは、出自や社会性への自信というものに留まらず、話している自分の存在の無条件な確かさへと向けられています。言語に包まれて神話的に安らっているけれども、人にはその言語的なおくるみを剥がして、生身の自分を見たいという実現困難な欲求も備わっていますから、それが一方ではアイデンティティについての自信のぐらつきを発生させます。精神分析は、そのようなアイデンティティの不安な志向性を、否定することなく辿ってゆく作業です。

## 2. 寸断された身体からの再生

「波打ち際の状景」という夢表現は夢の語法では分娩の象徴ですが、では逆に分娩の象徴は波打ち際だけにあるのかと言えば、必ずしもそうではありません。他の形で

も分娩に関連した象徴は出現します。関連する例の一つが、「寸断された身体」のイメージです。先ほどの夢でアンダーラインで示しておいた「その子の崩れ落ちた骨」というのも、この「寸断身体」に数え入れることができます。次にそんな夢を一つご紹介します。

私はある女優に扮して、ある医学校に何かの用事で来ていた。この学校ではかつて激しい政治闘争のあったことが壁に描かれていた。彼女の用事は、病人を見舞いに来たか、それとも犯罪人の処刑日で、遺体解剖の行われているのを知ってか知らずか、その犯罪人の死体を探しに来たのかも知れない……。最後に、全裸の彼女が、遺体はどこですかと医者たちに聞き、そこでやっと、ずたずたに引き裂かれた死体と対面する。彼女は死体の首を切り取り、喜々として走り廻った。自分も脇腹のあたりが傷ついていた。いや、下腹部が無残にも引き裂かれ、臓器や血液が外部に流れ出るままになっていた。彼女は馬に乗って城内を駆けた（時代は江戸時代に移っていた）。そして一言、「すべては父の仰せのまま」と言って走り去った。

この夢を報告してくれた青年は現実には男性ですが、夢の中では女性（「女優」）に扮しています。夢の場面の特徴は、まず壁に「文字」が書かれていて歴史を語っていること、そして「ずたずたに引き裂かれた死体」という印象的な図像があって、女優であるその女性はその死体から首を切り取って、馬上でその首を掲げること、さらに加えて、女性自身の下腹部もまた裂けていて、血液や臓器が流出していることです。

場面は、分娩を表していることが直観的に見て取れると思います。身体の切痕の夢心像は出産を表すということはすでにラカンも指摘しています。波打ち際の出産は通常の出産でしょうが、切痕からの出産はカエサル型、つまり帝王切開による分娩です。興味深いことに、その出産の前段階が寸断された身体であり、さらに寸断された身体から首が取り出されてくるに至る歴史が、壁の文字になって語られています。この「文字」が内包する、歴史を語る力は、先ほどの夢での「手帳」や「詩集」や「画面の白い点」を思い出させます。

そこで、あの波打ち際の子の夢の光景を振り返って比較してみましょう。あの夢もまた、ばらばらの骨となった子どもが、長じて詩人となって詩集を書き残して再び死に、今度は生きて夢を見ている人自身が夢に入り込んで、その詩集を再出版するために、詩人に代わって脳を働かせるという、死と再生が繰り返される歴史物語でした。これもたいへん神話的に物語られている夢だったと言えます。

日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析  
(新宮一成)

実際、口承から文字となって我々の手もとに伝わっている神話にも、死と再生（「第二の誕生日」に当たるでしょう）の筋書きはしばしば備わり、夢と同質の歴史物語の質を明示的に帯びています。その例証として、再び日本神話を、そしてさらに北欧神話を見てゆきましょう。

3. 日本神話と北欧神話における波打ち際と、寸断された身体からの再生場面

日本神話に登場する大国主命のお話は、ほとんどの日本人が幼少期に聞かされているでしょう。因幡の白兔の逸話と共に有名なこの神は、死と再生を繰り返す物語の主人公です。この神は「寸断された身体」の経験けみを聞きいています。

大国主命は、またの名を大穴牟遲神おほあなむぢのかみといいいます。大穴牟遲神おほあなむぢのかみは、多くの異母兄弟たちの嫉妬を受けて、体を残酷に破壊されて2回も死にますが、女神たちによってそのつど甦ります。その1回目は、赤く焼けた灼熱の石に身体を焼き付けられて死にます。このとき、赤貝の女神が、その石から彼の身体をこそげ取り、こそげ取ったときにばらばらになった身体部分を集め、それを蛤の女神が受け取って、彼の母神の乳汁を塗りつけます。そうすると、麗しき男となって外に遊びに出た、と古事記には書かれています。さらにまた危険な目に合わせられたあと、須佐之男すさのおおみ大神のもとに赴いて、その娘と結ばれますが、大神からの数々の試練を受け、それを娘の助けで潜り抜けて逃げ、逃げおおせる時に大神から投げつけられるようにもらった名前が、「大国主命」でした。そのあとこの命は、異母兄弟たちを追い払い、国造りをする英雄となります。

大国主という名は、ある面ではどこか官職名みたいに響きますが、やはり試練を潜り抜けて父祖である大神から認められてアイデンティティを確立することを示す名前であると見る事ができます。振り返ると、焼けた石に焼き付けられ、なんとかそこから「こそげ取って」もらったけれどばらばらになってしまった身体を、母の乳汁の力で元に戻してもらうところとかは、先ほどお話した夢のなかの、「父の仰せ」を馬上から宣言する母のような女性が手に掲げる、寸断身体から切り取られた「首」の辿る運命に似ているところがあります。

フィンランドの神話『カレワラ』には、男前だがいささか軽佻浮薄な勇者レンミンカイネンが登場します。レンミンカイネンは、美人の噂のある他国の女性を獲得するために、その国の支配者に戦いを挑みますが、年老いた羊飼いを侮辱したためにその羊飼いが駆使する蛇の魔法に引っかかります。そして、トゥオネラ（冥府）の川に住む白鳥を射るという試練を果たす途上で、蛇に身体の中を食いちぎられて死んでしまうのです。

その体は暗い川にばらばらになって流れてゆきます。しかし息子のために駆け付けたレンミンカイネンの母は、この勇者の身体の断片を、熊手でかき集め、それらを血管縫合の女神の言葉の力を借りて縫い合わせて一つに戻します。こんな具合にです。

「あかがねの熊手で トウオネラの川に沿って 川に沿ってまた横切つて。手を見つけ 頭を手に入れ 背骨を半分手に入れた あばらの別な半分も その他多くの肉片も。これで息子を組み立てた。」

このように非常にはっきりと、寸断された身体の像が描き出されます。大国主にしてもレンミンカイネンにしても、遠い古代には、洋の東西を問わず、英雄になるということがどういうことであるかを、神話は雄弁に語っています。それは、他国を支配すべく、その国の主の美しい娘を手に入れるということでした。けれどもその冒険の途上で、体をばらばらにされるのです。しかし母によって救われて、主人公は再び他国征服に向かうことになります。また、大国主命では、身体が寸断されてしまうときにそれを取り巻くものは「火」でした。つまり焼けた石でした。それに対してレンミンカイネンでは、川の水でした。弁証法的に対立する二つの要素である火と水は、神話の筋書きの中では、生と死の間で人の存在を聖化する役目を果たすのだと思われます。ちなみに、大国主命の蘇生の舞台が海に近いことは、「赤貝」や「蛤」という、女神たちの名前から伺えます。さらには、神武天皇の祖父は、火を放たれた産屋の中から無事に生まれ、父は海辺の渚で生まれるのですから、天の神の子というものは火と水の両方の聖化作用を潜り抜けてそのものとして認められるようです。

### Ⅲ. 神話的アイデンティティの成熟とその構造分析

#### 1. 神話の分析の構造主義的伝統

寸断された身体をはじめとする、現代の夢と古来の神話に共通する要素が放つ強い印象は、現代社会の中を成長してゆく個体にとっても、心の中では集団的な神話の筋書きが力を揮っているであろうことを推察させます。そして精神分析的治療がその神話の働きに係りをもってゆこうとするものであることもまた、確からしく思われます。こうした印象を確認し、さらに考察するために、どんな方法があるでしょうか？ ここで登場するのが、ラカンに強い影響を与えた、レヴィーストロースによる神話の構造分析です。最後の節では、ここまでに挙げてきた考え方や事例を基にしながら、夢と神話の共通性を浮かび上がらせる構造分析の考え方についてお話しします。

日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析  
(新宮一成)

まずは少し構造主義の考え方を振り返っておくことをお許しください。いうまでもなく構造主義は、構造言語学の祖フェルディナン・ド・ソシュールを<sup>もと</sup>基とするとされています。ソシュールはフロイトと生年がさして変わらない年代の人で、フロイトと同じく、若い才能たちに大きな影響を与えてゆきます。その中に言語学者のロマーン・ヤーコブソンと、文化人類学者のクロード・レヴィーストローヌがいます。また、ロシア・フォルマリズムの民俗学者であるウラジーミル・プロップは、ソシュールの影響を受けたかのような構造主義的な方法で、ロシアの民話を研究しました。ヤーコブソンは、ソシュールにもプロップにも影響を受けています。このうち、レヴィーストローヌとロマーン・ヤーコブソンはラカンに決定的な影響を与えました。

ソシュールの構造言語学では、われわれがふつうに「言葉」と言っているものを、ある種の記号として扱います。その意味での言葉は、H<sub>2</sub>O という記号が何を指すかわれわれが知っているのと同じように、外部の指示対象に対応します。この場合、H<sub>2</sub>O という記号は万国共通の約束になっている一方で、[mizu] は言語記号ですが、万国共通ではありません。ここで、この [mizu] という言語記号そのものについて見てみると、それは音声面と概念面の両面からできていることがわかります。[mizu] の音声面はたしかに万国共通とはなっていませんが、その概念面は、たぶん（と言うしかありません）、万国共通です。この事態をよく見ると、万国共通ではない音に、万国共通なものをくっつけているという非対称な構造になっています。この非対称な構造のゆえに、人間の言語は、何種類もあって、しかも相互に意味を受け渡しできるのですが、注意すべきことは、二つの面は非対称であることと関連して、本来は相互に無関係であることです。無関係であることは経験的な面からはっきり意識できます。[mizu] の音声面は日本では H<sub>2</sub>O の概念にくっつくことができますが、他国ではそうではなく、[mizu] は日本と同じ言語記号にはならないのです。

こうして、言語記号を2面に分けてみたときに、自国の言葉が他国で通じないときの違和感がよく理解できます。言語記号は、単体ではなくて合成物ですから、その音声面を「シニフィアン (signifiant)」と呼び、概念面を「(シニフィエ signifié)」と呼びましょうというのが、ソシュールの考えであったわけです。このように考えてみるこの影響力は、人にとってたいへん大きいものです。言葉の音声面つまりシニフィアンは、頭の中の概念にしか対応していませんから、言葉の音声面を口から発したからといって、それが現実に届くとは限らず、逆に現実を見たからといってそれが言葉の音声面を思い出させてくれるとも限りません。そういうもどかしさを人は始終経験しますが、このもどかしさは、このソシュールの考え方によって納得できます。つまり、

言葉の音声面であるシニフィアンの本来的な働きは、一応頭の中に限られたものなので、それが何に結び付くかという、本来は概念にのみであります。外的現実にはありません。そして、これが重要なことですが、他のシニフィアンにも盛んに結びつくのです。概念あるいはシニフィエは現実と対応してこそ思考に使えるのですが、音声あるいはシニフィアンは、現実と対応していないのに他のシニフィアンと頭の中で結びついてしまうので、言語記号の組織の中にずれを生み出してしまいます。言い間違いや駄洒落などが発生します。

そしてさらに重要なことに、シニフィアンとシニフィエの非対称、あるいは本来的な無関係性を、われわれは別のレベルに平行移動して確認することができます。たとえば夢というレベルです。本日お話しした夢と関連のあるテーマとして、妊娠を象徴する夢に即して申します。今、夢が象徴すると申しましたが、先ほどの説明から、これは夢の中の何らかのシニフィアンが「妊娠という概念と結びつく」という意味だとお分かりだと思います。何らかの夢を一つの「シニフィアン」の位置に置くことができると仮定すると、シニフィエは、夢が結びつく妊娠の概念にあたります。現実の妊娠ではありません。このシニフィアンとしての夢は、実は「虫にたかられる」です。蛇も虫の一つです（虫偏に注意してください）。古くからの民間伝承では、生殖年齢の女性が「蛇の夢」を見れば、おめでた、ということになっていました。これは、当たらずとも遠からずという面があるにせよ、シニフィアンを、概念を乗り越えて現実にまで作用が届くものとしている点で、予言的な過剰解釈、あるいは呪術的解釈だと言えます。それでも、民間伝承を軽視してはいけません。妊娠の概念を持っている女性の何割かは、妊娠した女性であるからです。実際、「ベッドに蛇が居て、びっくりして飛び起きた」という夢を続けて何回も見た女性から、妊娠していないと分かったら、とたんにその夢を見なくなった、という報告を聞いたことがあります。「妊娠しているかもしれない」という観念ないしは概念を頭の中に抱えるだけで、現実はどうあれ、夢の中には「虫にたかられる」というシニフィアンがやってくるのです。おそらく、記憶された聴覚映像経由で視覚まで来たのだと思われます。何も神秘的なことではありません。本来無関係であるものも、確率的には結びつきを見出すはずで

もちろん、神話のレベルにおいてこのメカニズムが用いられるときは十分以上に神秘的に演出されます。先にお話ししました北欧の『カレワラ』神話では、主人公たちの何人かは、言葉を歌に乗せることによって、その言葉を物体として目の前に創り出すという魔法を駆使します。船を歌えば目の前に一隻の船が現れるなどで、それによって神話の筋書きを変化させるのです。言葉を歌にすることが、魔法の重要な構成要素

日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析  
(新宮一成)

なのだと気づかれます。夢の場合は視覚的な像でもシニフィアンとして作用すると考えて、シニフィアンの概念をちょっと拡張しましたが、この魔法の歌の神話でしたら、歌は聴覚的な印刻ですから、シニフィアンの元の定義に、より近接しています。

このように、民間伝承や神話のレベルでは、ソシユールがシニフィアンという語で名指した言語的要素が、象徴を介して強烈に作動しています。個人の夢の中にもそれが及びます。幼少期から接する聴覚的シニフィアンによって、集団的な観念や随伴する伝統儀礼が、個人の精神活動の中に食い込んでいると言って間違いではないと思います。

そしてこれが事実であるとするれば、シニフィアンのレベルに置かれた神話、民話、夢の共通要素を順序良く配列すれば、こうした集団の談話や個人の無意識の言語活動に対応する隠れた共通の筋書きが得られるであろうということになり、しかも言語の系統樹と神話の系統樹が、ある程度まで重なっていることが証明できるだろうということになってきます。壮大すぎる発想のように思われるかもしれませんが、必ずしもそうばかりとは言えません。

先に言及しましたプロップの民話研究ですと、物語に登場する主人公たちの主観性をまず括弧に入れてしまって、どの登場人物たちであってもよいから、登場者たちが行う特徴的な動きのみに着目して、それを「機能」としておきます。たとえば、民話では物語の最初に誰かの「不在」がある、といった形でその「機能」が出てきます。そうしてそれら数十件の「機能」たちが呼応し合って、筋書きを作り上げます。プロップには「主人公が〇〇する」という言い方がまだありますが、私は夢の場合にはこの言い方を消去しても、〇〇に当たる「機能」だけで筋書きは作られると考えています。夢の場合は、「主人公」らしき者が入れ替わっても筋書きが保たれると仮定して分析を進めたほうが大きな発見があります。シニフィアンの音声の差異の体系の自律性が人間の主体性を凌駕する契機、それが時間経過の折々の隙間に訪れるというスタイルで、民話や神話の筋書きは進むのです。

こうした「機能」配列を非常に多くの神話について推し進めて、地球規模でマッピングすれば、今触れたような壮大な発想での研究が出来上がるはずで、「人間はどのようにして存在するようになったか？」という問いは、フロイトが指摘しているように幼い人間の自発的で切実な問いであり、神話はその人類共通の問いに答える形で世界や人類の創造を語ります。そのようにして世界中に存在する神話の筋書きを集大成しようとしたのが、先般、中谷先生の招きで龍谷大学で講演されたマイケル・ウィッツェル (Michael Witzel) 教授の研究です (2023年3月9日、表題は“A New Approach

to Mythology”)。講演でヴィッツェル教授は、世界の人類の神話のストーリーラインは、2方向に集約、あるいは巨視的に分類される、と結論しました。一つには、北半球主体に、地表を広く覆うような形で90%の人々が伝えてきている Laurasia 型の神話があり、もう一方には、主に南半球に住まうわずか5%以下の人々の間からその残滓が聴き取られる Gondwana 型の神話があるといえます。後者の方が先行型を示しているのですが、前者の拡大に押されて消えゆくことが懸念されます。ちなみに両者の根源となる神話の発生地は、6万5千年前のアフリカであると想定されています。

ヴィッツェル教授もレヴィーストローヌやプロップの分析法を踏まえておられたと思いますが、大規模に神話を機能的に分析してゆくと、北の Laurasia 型と南の Gondwana 型は、相互に並行的に比較対照させることができ、いくつかの項目での対比が際立ってきます。中でも注目されることとして、先行型である Gondwana 型では初めに天地が先在し、人間が木や土から創り出されたとするのに対し、Laurasia 型では、初めにはカオスあるいは無があり、そこから天が分化し、天に現れた神の子孫として人間が出現します。日本神話は、ギリシャ神話と同じく基本的には Laurasia 型だと見なせます。雲の上から天の孫が降ってきて、地の神の娘と夫婦になって、そこから生まれた男性の半神半人が、また別の土地の女性と婚姻して、支配層が次々と生み出されます。先ほど大国主やレンミンカイネンで見た通りです。この Laurasia 型のストーリーラインは、近代の哲学的な思考の中にも結実しているというのがヴィッツェル教授の意見です。たとえばポール・ゴーギャンの絵の題として有名な「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」という問いは、Laurasia 型のストーリーラインの延長線上に必然的に生まれてきます。そしてこの問いは自らのアイデンティティを問うていますから、この問いを発して自らの起源を求めることによって、人はストーリーラインの中でいったん立ち止まることもあるのだと分かります。日本人の場合もたぶん同じです。「おぼつか<sup>た</sup>な誰れに問はましいかにして はじめも果ても 知らぬ我が身ぞ」と歌った、光源氏の血の繋がらぬ息子・薫の迷いは、タヒチに来たこのフランス人の迷いと同じ形をしています。彼はこの迷いに答えるべくアイデンティティを求めて、まるで薄暗がりの中で立ち止まっているかのような青年期を送り、その婚約者・浮舟も、「舟」という名に導かれるように宇治川の水辺にさ迷い出して出家に至ります。

日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析  
(新宮一成)

2. 北の Laurasia 型と 南の Gondwana 型の混成型としての極東神話と日本人の夢

ヴィツェル教授の二分法が興味深いのは、必ずしも各国の神話をどちらかに分類できるからだけではありません。われわれ日本人にとっては、片方の中に他方が挿入されていることを見出せることが特に示唆的なのです。Gondwana 型が先行型で Laurasia 型が後発型である以上、多数派となった Laurasia 型の話の中には、自らの祖型である Gondwana 型のいわば残響が聞き取れます。その残響は、極東の神話でも強い響きを発しているように思われます。日本神話を読んでいて、ちょっとした違和感にはっとさせられるところがそういうところなのです。たとえば須佐之男命<sup>すさのをのみこと</sup>は、高天原を追放されるに当たり、食事を供してくれた大宜津比売<sup>おほげつひめ</sup>という女神を切り殺してしまいますが、その死体の頭、目、耳、鼻、陰(ほと)、尻に、それぞれ蚕、稲、粟、小豆、麦、大豆が生<sup>な</sup>り、それらを高天原の神が採りに来ます。先の「寸断された身体」の各部から民族の基幹的な衣料・食糧が生育するのです。振り返ってみますと、須佐之男命<sup>すさのをのみこと</sup>の六世の孫である大国主命の場合は、神自身が「寸断された身体」になってしまいますが、そこから貝の女神を通していわば海の命をもらって、元気に復活したのです。「寸断された身体」から何が出て来たかという点から見ると、父祖的な大神が殺した女神の身体は変容して食料になり、兄弟に殺された大国主からは、大国主自身が復活して出てきます。食料が出るか人が出るか、明瞭に対比的です。そこでインドネシアの『ハイヌウェレ神話』を見ておきます。ハイヌウェレというのは、ココヤシの木の花から生まれた少女で、そのココヤシを森で見つけたのはアメタという男で、この人は原初の人類です。少女の排泄物はすべて貴重な品物となりました。ところが、「男たちは踊りの広場に深い穴を掘った。踊りの輪の中で、男たちは少女ハイヌウェレを穴の方へ押しつめ、その中へ落とし込んだ。人々は彼女に土をかぶせ、穴の上の土を踏み固めた。そのあとアメタがやって来て、少女を土中から掘り出し、身体各部分を切り離して土中に埋めた。するとその各部分から、当時地上にはなかったもの、つまり、主たる食料であるイモが生えた」と続きます。古事記<sup>おほげつひめ</sup>の大宜津比売と同じように、ハイヌウェレは殺されて寸断された身体となり、その各部分から基幹的な食糧が生い育ちます。このインドネシア神話は、Gondwana 型と言えます。というのは、少女が木から発生し、殺されて、次に土から生えて、食料に変わるというのですから。

こんどは夢のほうを見てみましょう。先に見ました「海岸の子どものぼらぼらになった骨」の跡には詩人が出現し、また、もう一つの夢の「刑死した人物のずたずたに引き裂かれた遺体」からは将来の城主になりそうな頭脳が切り取られるのです。こ

## 論 文

れらは、大国主命と同じ方向性を進んでいます。<sup>おほげつひめ</sup>大宜津比売の方向ではありません。しかし次の夢ではどうでしょう。これもある女性から私が報告を受けた夢です。

「子どもが道路に出ようとしていたので追いかけていった。手を引っ張ったとたんに溝に落ちて気を失った。あとで、見知らぬ人に、子どもはなくなったことを知らされた。そのあと近くの畑にいた。畑にはサツマイモがたくさんあった。姉がサツマイモを持って帰ろうとしたら、上の姉が、この畑はほかに売ってしまったものだからだめだと言っていた。畑のあとには、まだ完成していない建物が建てられていた。姉の話によると、パン工場ができるということだった。」

子どもが亡くなったあとには、イモとパンが次々と出現しています。はっきりと寸断された身体は出て来ませんが、ここでの食料の出現は、どうしても女神ハイヌウェレの運命—自らは死して人間にとっての大事な食糧の起源と化す—を思い出させます。この夢はむしろ<sup>おほげつひめ</sup>大宜津比売型ではなく大宜津比売型です。

「寸断された身体」という一つの像からは、日本神話では大国主命の方向と、<sup>おほげつひめ</sup>大宜津比売の方向のどちらにも進むことがあり得ます（外国の神話でいうなら、レンミンカイネンの方向か、ハイヌウェレの方向かということです）。日本の個人の夢においても、同様に、大国主命的な方向と<sup>おほげつひめ</sup>大宜津比売的な方向のどちらにも進むことがあり得ます。このことをヴィッツェル教授の二分法に照らしてみますと、日本神話と日本人の夢では、Laurasia 型のストーリーラインを基本とする中に、Gondwana 型のストーリーラインが混入してくる契機があると考えられます。「寸断された身体」は、まさにその接点かつ分岐点を示すという機能を果たしています。

こうした重要な機能は、プロップの言う民話の筋書きの中の諸機能と同じように、別の機能と結びつくことによって、漸化式方式で、ストーリーラインを織り上げてゆきます。二項対立を反復することで進んでゆくことが特徴の、神話のストーリーラインの、もう一つの構造主義的な特徴は、いくつかの機能から成るストーリーラインが、複数の神話に共有されていること、しかもその共有が、それぞれの神話の特徴を邪魔しないということだと言えます。

中国に目を転じて、同様のことが観察できます。中国にも、世界の初発という同じ神話的項目に関して、対照的な二つの語られ方があります。一つは、<sup>じよか</sup>女媧という女神が、土を捏ねて人間を造ったというものです。土で人を作るので Gondwana 型に入ると思います。一方、それと併存するかのよう、天帝の精神的な力を絶対的なものとし、太陽でさえも天帝が作ったと語る神話もあります。この神話では原初に太陽は

## 日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析 (新宮一成)

10 個あった、どれも天帝の息子であって、この暴れん坊息子たちのため人間たちは暑さに参った、と語られます。それで弓の名手が、9 個までを打ち落とし、その殊勲により西王母から不死の妙薬を授かるが、その妙薬を妻の嫦娥が飲んでしまって、嫦娥は月に行ったということです。ちなみに中国が打ち上げに成功した月探査ロケットにはこの嫦娥の名がついていますから、神話は今も語り継がれていることが分かります。ここでは天帝の威力はまさに造物主的であり、典型的に Laurasia 型です。中国に関しても、広い国土の中で、神話の系統は、2 つの組み合わせで見ることができそうです。

### 3. 夢的/神話的ストーリーラインと内面的アイデンティティ

構造主義的なストーリーラインの概念からすると、神話の出だしの世界や人間の創造はプロップのいう意味での「機能」に入れることができますから、これを先ほどの寸断された身体という「機能」に接続させてみましょう。「寸断された身体」を加えた Gondwana 型ですと、「木や土から人間が生じる→人間の身体がばらばらになる→その各部分が食料に変わる」という機能系列ができます。同じく「寸断された身体」を加えた Laurasia 型ですと、「天である神の子孫として人間が生まれる→兄弟間や国の間での闘争により人間の身体はばらばらにされる→母などの力によりばらばらになった身体は再び英雄的に甦る」となります。どちらにおいても、中間には「寸断された身体」という機能が働いています。そして、二つの神話型のそれぞれに、その次の機能が現れます。Gondwana 型ですと、人間の各部分から食料が生じるとなり、Laurasia 型ですと、人間の各部分は英雄的人間として再生するとなります。

精神分析的に見ると、Gondwana 型では、人間とその食糧とは、「ばらばらになる」ことを挟んで、互いに同一化し合っています。循環していると言ってもよいと思います。「いのち」が、人間と食料（主として植物）の間を貫通しているという感覚が、この神話で暮らしている人々の間にはあると思います。一方、Laurasia 型ですと、人間は、先祖と自分との間で同一化し合っています。人間が、自分を造ってくれた先祖として神を創ると、神は人間を造ってくれるという循環が生じます。そしてこの「先祖」は、いずれ血筋の先祖として思念されるようになりますから、同一化は、神に守られた一族という意識へと変化することになります。

こうして、それぞれのやり方で、食物で自らをアイデンティファイする人々と、先祖神で自らをアイデンティファイする人々が分岐することになります。けれども、体がばらばらになるという機能のところは共有されていますから、この部分に心の中で

到達すると、反対側へと精神活動が移ってゆく可能性を、互いにどちらもが帯びることになります。

おそらく今の日本人としてのわれわれは、Laurasia 型神話の中で生きるアイデンティティを蓄えていながらも、時に応じて Gondwana 型神話の中に身を置いてみて、迷いを経験しているのではないかと思われます。具体的なタイプで言えば、大国主命/レンミンカイネン型の神話的アイデンティティを基本としながら、<sup>おほげつひめ</sup>大宜津比売/ハイヌウェレ型の神話的アイデンティティに進める可能性を、折に触れて発見しつつ、アイデンティティは古層への広がりを含み込んで成熟してゆくのであると思われます。

## おわりに

通常は精神分析的、あるいは心理学的な概念として用いられるアイデンティティは、このように夢を含めた構造神話学的な見方で捉えることが可能です。様々な神話を参照しながら、神話をプロップのいう「機能」ごとに追跡してゆくと、アイデンティティ形成を旅路の軌跡のように描いてゆくことになります。分岐点に差し掛かって、ゴーガンや薫のように迷いが生じた時には、神話的アイデンティティの道には、元の波打ち際まで戻れる可能性が残されています。夢見る機能などによって、心の中には「退行」という道があるからです。睡眠という生理学的機能が大切なのは実はそのためです。夢見ることができるということ、それは過去の経験の形を、未来的な形に変えて目の前にストーリーのように映し出しているということです。したがって自分自身の夢を神話に照らしながら吟味することで（フロイト自身が行ったように）、自分がどんな人生の道を歩んできたのかをよく理解することができます。夜の夢の間に、自分の影が描いた軌跡のように確認されるアイデンティティは、影法師のアイデンティティなのかもしれませんが、そのアイデンティティは影と同じで失くすことはできないものです。

夢の中に入り込んでいる神話的な要素という観点から、日本人のアイデンティティについて精神科医としての私の考えをお話しさせていただきました。御清聴有り難うございました。

## 主要な基本的参考文献

### Ⅰ 節（波打ち際での誕生）

日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析  
(新宮一成)

Lacan J. (1971) *Le Séminaire, livre XVIII: D'un discours qui ne serait pas du semblant.*

Text établi par J.-A. Miller (2006) Paris: Seuil.

釈迢空 (1925) 『海やまのあひだ：自選歌集』 東京：改造社.

II 節 (夢と神話)

太安万侶編 (712) 『古事記』, 山田佳紀・神野志隆光校注・訳, 日本古典文学全集 1  
(1997) 東京：小学館.

Lönnrot, E. 編 (1835), 小泉保訳 (1976) 『カレワラ』 東京：岩波書店.

新宮一成 (1988) 『夢と構造』 東京：弘文堂.

III 節 (神話の構造分析)

Saussure, F. de (1915) *Cours de Linguistique Générale.* 小林英夫訳 (1940) 『一般言語学講義』 東京：岩波書店.

ウラジーミル・ヤ・プロップ 『民話の形態学』 大木伸一訳 (1972) 東京：白馬書房.

Lévi-Strauss, C. (1958) *Anthropologie Structurale.* 田島節夫訳 (1972) 『構造人類学』 東京：みすず書房.

Witzel, M. (2023) *A New Approach to Mythology.* (講演) 「自省利他」 科研公開討論会  
(研究代表者：中谷英明) 令和 5 年 3 月 9 日 龍谷大学大宮学舎西翼.

吉田敦彦 (2007) 『日本神話の源流』 東京：講談社学術文庫.

(本原稿は、2023 年 3 月 26 日に行われた WEB 講演のスライドを基に書き起こしたものである。最後の節には若干の加筆を施した。)

# 『フランス語・チベット語辞典』(1956)に記録 される雲南チベット語の性質について\*

鈴木博之

## 1. はじめに

19世紀中ごろから20世紀前半にかけて中国西南地域において活躍したフランスの宣教師らが編纂したチベット語辞典に、*Dictionnaire thibétain-latin-français* (1899) (以下、DTLF) と *Dictionnaire français-tibétain (Tibet oriental)* (1956) (以下、DFT) の2つがある。これらに共通しているのは、東チベットで話されている口語形式が収録されている点である。特に、DFTはタイトルにあるように、東チベットに限定されているところが特徴的で、その記述を丁寧に分析していけば、当時の口語形式を反映した貴重な資料になるといえる。

ところが、これらの口語形式に注目した研究はほとんど行われてこなかった。扱うのを困難にしている問題の中核は、東チベットで話されているチベット系諸言語が多様であり (Tournadre & Suzuki 2023 参照)、単に「東チベット」という名称が指しうる範囲で記録対象の言語を特定することができない点にある。DFTの書評 (de Jong 1957) にも類似の指摘がある。DTLFもまた採録された形式に口語を反映するものが少なくなく、その中で鈴木 (2019) が動詞 *snang* について取り上げ、その口語形式の用法が特定の方言群に見られるものという結論を得ている。

本稿で取り上げるDFTについて見ると、その序文には表1に示す地名に言及されていて、DFTに収録される口語形式の出自は大部分がその地名に対応する地域で話されている口語に依拠した可能性が考えられる。分布言語は Tournadre & Suzuki (2023) による言語分類による。

表1の各地点の具体的な地理的位置を図1に示す。この中で、DFTの編者であるジロドー (Pierre Philippe Giraudeau) とゴレ (François Goré) が長期間過ごした地点は

\*本稿の一部は2021年の第3回日本地理言語学会研究大会で発表したものである。

『フランス語・チベット語辞典』（1956）に記録される雲南チベット語の性質について  
 (鈴木博之)

表 1: DFT の序文に掲載される地名と現代の地点および分布言語

| 序文の地名     | 対応する現在の行政区分名による地点   | 分布言語               |
|-----------|---------------------|--------------------|
| Yerkalo   | チベット自治区昌都市芒康県納西郷鹽井村 | 南路方言群              |
| Batang    | 四川省甘孜州巴塘県夏瓊鎮        | 南路方言群              |
| Yaregong  | 四川省甘孜州巴塘県亞日貢郷       | 南路方言群              |
| Tongolo   | 四川省甘孜州康定市新都橋鎮東俄洛村   | Minyag Rabgang 方言群 |
| Tatsienlu | 四川省甘孜州康定市爐城鎮        | Minyag Rabgang 方言群 |
| Tsechung  | 雲南省迪慶州徳欽県燕門郷茨中村     | Sems-kyi-nyila 方言群 |

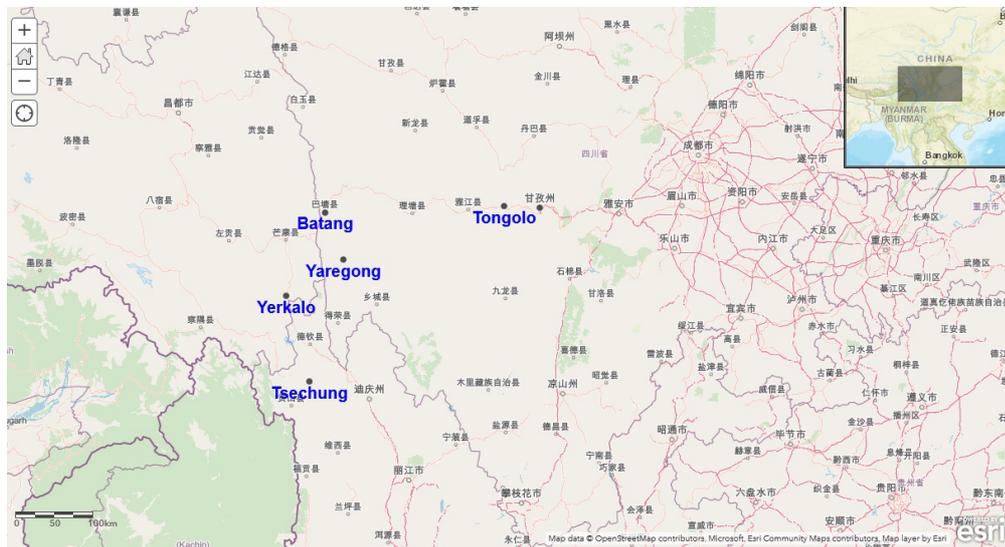
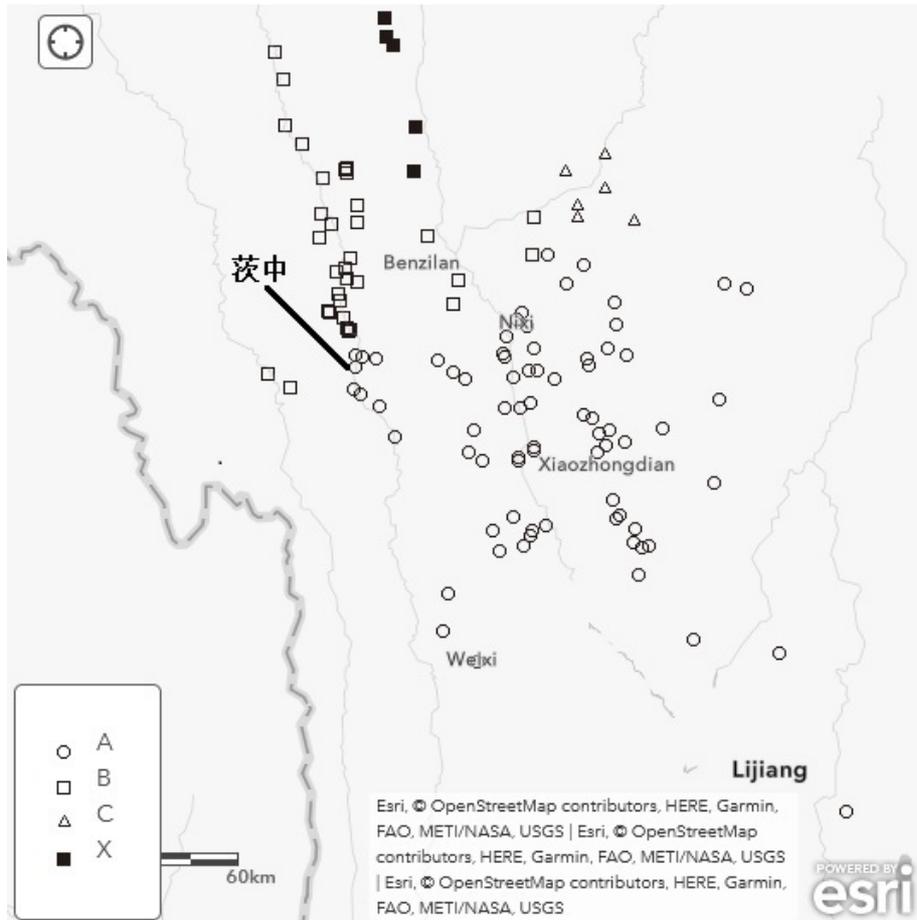


図 1: DFT の序文に掲載される地名とその地理的位置

Tsechung（茨中）であることが知られている。したがって、DFT の記述においても当時茨中で話されていた言語を反映したものが多くことが想定される。DFT に収録される語形には、特に (Yun.) とされているものが複数含まれている。これらは少なくとも茨中およびその周辺に特化した形式と推測できるが、まとまって検証されているわけではない。



凡例 A: Sems-kyi-nyila 方言群; B: sDerong-nJol 方言群; C: Chaphreng 方言群; X: 南路方言群

図 2: 雲南省のチベット系諸言語の分類と茨中の位置

ここで問題にすべきは、茨中で話されているチベット系諸言語である。「茨中方言」と呼ぶべきものは、筆者の最新の見解（鈴木 2022）に基づくと、徳欽県中央部の諸方言とは異なり、香格里拉市を中心に話される Sems-kyi-nyila 方言群に属する変種である。図 2 に示すように、茨中およびその周辺の諸方言は、地理的に連続する地域と異なる系統の方言群に属している。なお、現在の研究状況では、図 2 のような分布が

『フランス語・チベット語辞典』（1956）に記録される雲南チベット語の性質について  
（鈴木博之）

いつ成立したかは特定には至っていない。すなわち、DFT の語形式を研究することは、100 年程度の時間の幅で方言群の異同が見られるかを検証できる可能性もあると言える。

本稿では、DFT において (Yun.) と指示される語形式について、現代の茨中方言との関連を地理言語学的方法（Suzuki 2022, 2023 参照）で検討を試み、その文献資料としての価値を明確にするための事例研究を行う。この作業によって、DFT がチベット系諸言語の言語学的研究にどのように寄与するかを見ることができると考える。

## 2. 研究方法

DFT に反映される口語形式を検討するためには、まず表 1 に示された地点を含む地域で話されるチベット系諸言語の資料が判明していることが肝要である。この中で、(Yun.) と限定した記述のある形式を考えると、茨中方言を含む範囲に限定して検証することになる。同地点およびその周辺で話されるものを対象に考察を進めることで、編纂時に記録された言語と現代の諸言語の形式及び分布にある相関関係を明らかにすることができると思積もる。

筆者の手元には雲南省内のチベット系諸言語の資料として、図 2 に示すように、120 地点程度の記録がある。記録地点は雲南省のチベット文化圏内全体にわたり、かつ地点の分量の面から見ても、DFT の形式を検討するに足るものとする。加えて、図 1 に示した範囲のチベット系諸言語の資料も、地点の密度は低いものの、方言区分を知ることができる程度には把握している。これらの資料を参考にすれば、DFT に採録された語形式について、さらに検討が可能になる可能性が高まる。本稿では DFT で (Yun.) と指示される形式を取り上げるため、雲南省の資料に注目する。分析に当たっては、言語地図を作成して、対象の語形の地理的分布が視覚的に分かるようにする。これは、特定の地域にのみ分布することを理解するために必要な作業である。

なお、以下の議論において、チベット文語形式（以下「蔵文」）は de Nebesky-Wojkowitz (1956) に基づく転写で示す。蔵文は表音文字であり、古期の音価は格桑居冕、格桑央京 (2004: 379–390) による推定を参照する。また、方言名はローマ字表記で示し、初出の箇所では地点名の漢字表記を添える。

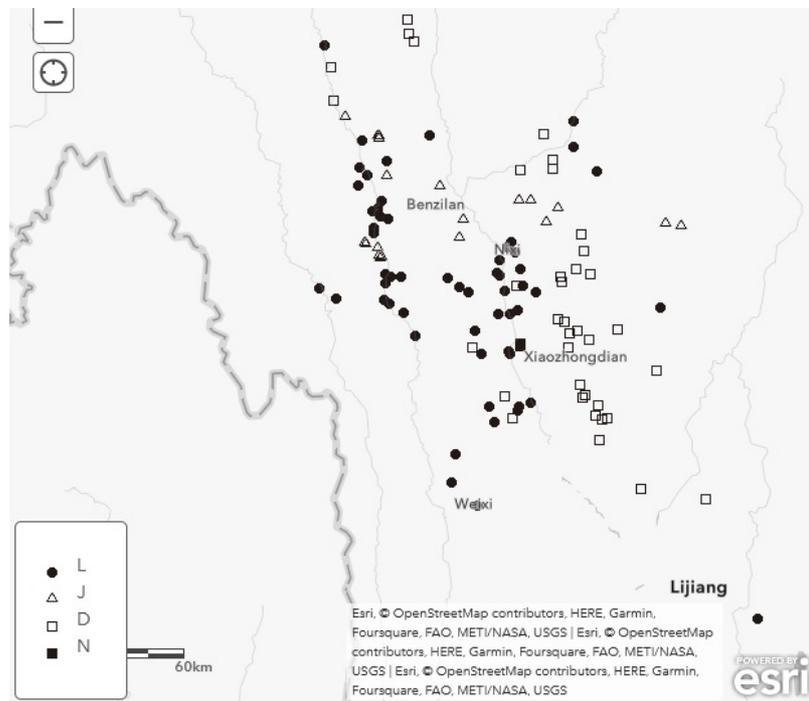
さて、DFT に記録される語形の分析に先立ち、事例研究として、音形式について検討することを通じて、DFT の記述からどのようなことが分かるか検討してみたい。ここでは「川」（DFT p.129）を例に取り上げる。見出し語 fleuve 「川」の箇所には、普通名詞としての語形式のほか、いくつかの固有名詞を記述している。その中に、表 1

## 論 文

の Yerkalo と Tsechung に地理的に関係の深いメコン川（瀾滄江）とサルウィン川（怒江）が含まれている。これらの形式について見ていく。なお、本稿では河川名に一律「メコン川」「サルウィン川」を用いる。

DFT では、「メコン川」の形式が藏文 *gla chu* であると記載され、直訳として ‘*fleuve du daim*’ 「ダマシカの川」と訳語が添えられている。一方、正則の藏文では、第1音節は *zla* とつづる。DFT は東チベットの形式を採録することを旨としていることから、辞書が正則の形式を採用していないうえ、掲載された語形に一致する訳（ここでは *gla < gla ba* 「キバノロ、ジャコウジカ」）を提示しているとすれば、そこには *gla* に対応する実際の発音が *zla* と一致するという特徴を反映した変種を話すチベット人が関与した可能性を指摘できる。まず、*gla* と *zla* は多くのチベット系諸言語で異なる音対応を見せるが、雲南の多くの地点で両者は同一の音対応になり、その形式は  $l^h$  または  $l^hj$  となる。これらは、たとえば *gla rtsi* 「麝香」と *zla ba / zla dkar* 「月」の初頭子音に注目すれば、どのような音対応の類型を示すかが分かる。

さて、正則のつづりで *zla* であることから、その対応音を「月」の語形式に求め、雲南のチベット系諸言語の初頭子音を言語地図に表したものを図3に示す。



凡例 L:  $l^h$ ; J:  $l^hj$ ; D:  $l^h d^h$ ; N:  $l^h n^h$

図3: 「月」の初頭子音の分類

『フランス語・チベット語辞典』(1956)に記録される雲南チベット語の性質について  
(鈴木博之)

DFTの形式は、初頭子音が/l/であることを示唆するため、図3のL類の形式の分布に注目する。すると、雲南のチベット系諸言語では多くの地域でL類となることが分かる。一方、地図の東側及び北端にはD類が集中して分布し、地図北部にJ類が東西に連続して分布する。音形式としては、L類とJ類につながりがある。鈴木(2021)が提示するように、蔵文lが/j/と対応する事例があり、これが「月」の語形にも適用された場合、L類からJ類が派生したと考えるのが自然である。N類については、D類とのつながりがあるかL類とのつながりがあるかは音形式から確定することはできない。ただし、語形式(Suzuki 2018:114-115 参照)も含めて考えた場合、N類はD類と共通するため、図3にもあるように、地図上の記号はN類とD類に四角形のものを当て、より近い関係にあることを示している。

さて、Tshodrug (=Tsechung; 茨中)方言の形式はL類となる。したがって、DFTが/l/を含む形式を採録しているのは問題ない。ここで注意が必要なのは、DFTに採録された語形は20世紀前半に通用していたものである点である。音形式および語形式ともに、方言特徴の分布が現代の形式と変化がある可能性もあることに注意しなければならない。「月」については、Tshodrug方言の周辺の比較的広い範囲においてL類を示すことから、DFTにおける形式は妥当性があるものと判断してよいだろう。なお、同じくメコン川沿いで話されるTshwakhalo (=Yerkalo; 鹽井)方言の形式はD類に分類される(Suzuki et al. 2021; 鈴木 2023)。

一方、「サルウィン川」の形式はrgya mo rngul chuと記載され、直訳として‘*fleuve de la sueur de la Chinoise*’「漢族女性の汗の川」と訳語が添えられている。一方、正則の蔵文では、第1音節はrgyalとつづられ、その直訳は「女王の汗」となるものである。DFTの記述は、単に正則でないつづりを採録したのではなく、名称の理解に際して「漢族」に言及があるため、rgya「漢族」とつづっているのは意図的であると判断できる。このことから、辞書の編纂過程で語形式の情報を得る際、「漢族」と理解しているチベット人が関与した可能性が示唆される。ただし、雲南をはじめ多くのカム地域のチベット系諸言語において、rgya「漢族」とrgyal「王族」は母音について同じ発音にはならない。両者の混同は民間語源に波及し、由来が失われた可能性もあるだろう。いずれにせよ、正則と異なる理解が見られる地域または個人が存在したことは、他には見られない情報として取り上げてよいものである。

以上、「川」という1つの見出し語の中に現れる語形式について、現代のチベット系諸言語の資料を用いて解説を試みた。このように語形の理解に多層性があり、各種チベット系言語の口語形式において明確な異同が見える事例は決して多くないが、以

上のような作業を通して、DFT に採録されている形式の来歴が「東チベット」という範囲からさらに小さい方言区画に限定することが可能であることを示している。

### 3. 雲南チベット語の語形

本節では、DFT の中で (Yun.) と注記される形式について議論する。(Yun.) とされる形式は、その多くがローマ字で音写されていることから、編者が対応する蔵文形式を見いだせなかったものと判断できる。逆に、蔵文形式が採録されている場合、上に議論した「川」の例のように、正則とは異なる理解の解説があってはじめて具体的な音特徴を見いだせる。

加えて、DFT には (Yun.) と指示されていなくても Tshodrug 方言およびそれに近い変種を記録したのも含まれる。たとえば porcelet 「子ぶた」(DFT p.223) などである (Suzuki 2019 参照)。したがって、DFT の内容を子細に検討することで、より多くの雲南のチベット系諸言語の形式が見つかる可能性もある。

音写という性質上、その精度については検討が必要な問題になる。また、音写のつづりが編者の母語であるフランス語に依っているのか、またはラテン語の読書音であるのか、その原則に関する説明は DFT 内には記載がない。加えて、DFT 全体を通して共通の原則によって音写されているかどうか、本来は注意しなければならない。本稿では、これらの問題に留意しながらも、個別に事例を検討するという形で処理する。この作業を積み重ねていくことで、同書の音写の性質が明らかになるという見通しをもって行う。

以上のような問題点を意識しつつ、本節では「子供」「氷」「ありがとう」の3例を取り上げ、それぞれ言語地図を作成し、その形式について Tshodrug 方言との関連をはじめとする特徴の説明を試みる。最後に、先の3例とは異なり不都合のある点について、「2」を取り上げて解説する。

#### 3. 1. enfant 「子供」(DFT p.108)

DFT には raro (Yun.) という記載があり、さらに nia niong (Batang) として mBathang (巴塘) 方言または巴塘県で話される方言の形式も採録されている。「子供」の語形については、雲南のチベット系諸言語の中で、語形式が多様に分かれ、比較的分散した分布を示す。図4は、「子供」の語形式について、その形式をおおまかに分類したものである。

『フランス語・チベット語辞典』（1956）に記録される雲南チベット語の性質について  
 (鈴木博之)

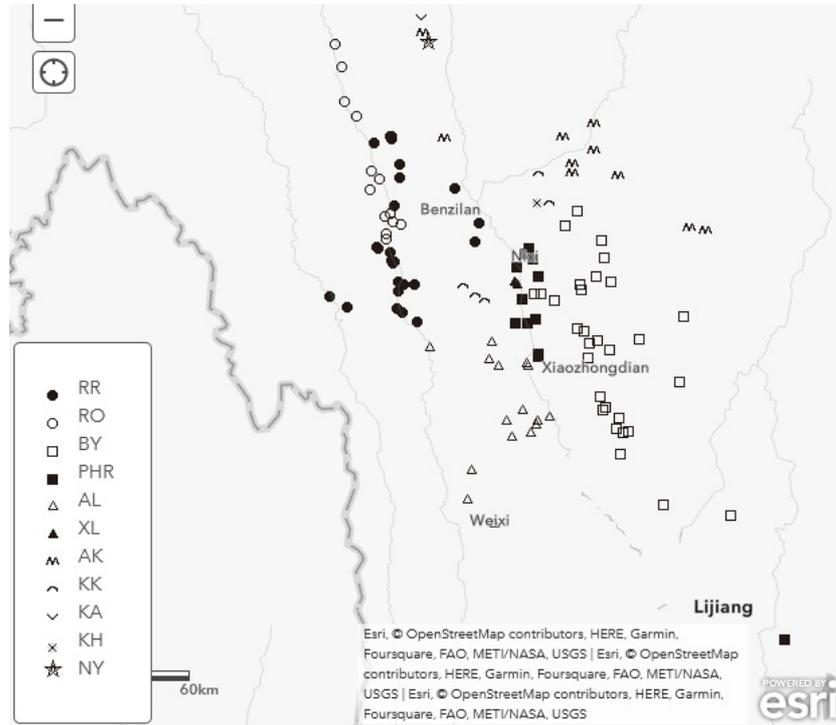


図 4: 「子供」の語形式の分類

まず、DFT の形式と地図の凡例を関連づけながら見ていく。DFT の raro に類する形式（RR 類、RO 類）はメコン川流域に分布する。これについては、藏文と対応関係をもたない。次に、DFT の nia niong に類する形式（NY 類）は gYagrawa（羊拉）方言に 1 地点にのみ見られ、藏文 nyag nyog「子供」と対応する。このほか、雲南のチベット系諸言語には藏文に対応関係がある BY 類（藏文 byis「子供」に対応）および PHR 類（藏文 phrug「子供」に対応）、/l/を含む AL 類と XL 類、/k/を含む AK 類、KK 類、KA 類、KH 類がある。なお、/k/を含む諸形式は「小さい」という語義と関連する。

いずれの語形式も、その地理的分布は一定の連続を形成する。このことから、raro は Tshodrug 方言を含むメコン川流域に分布する諸方言の形式と共通し、それを DFT が採録したと考えてよい。また、nia niong に藏文形式を採録しなかった点については背景を推測するに足る記述がない一方、2 音節末に鼻音要素を認めている点について、藏文形式 nyag nyog とは一致しないが、mBathang 方言を含むカムチベット語南路方言群に認められる [na: nō] (Lithang [理塘] 方言) や [nā: nī] (sDerong [得榮] 方言) といった形式を正確に音写したものであると推定して問題ないだろう。加えて、

nia niong のように、ni と書かれる部分は [ɲ] を意図している可能性を見る。[ɲ] であれば gn という音写を用いたのではないかと推測できる。これはチベット系諸言語の前部硬口蓋鼻音という特徴（Suzuki 2016 参照）をよく反映していると判断でき、編者がその音をフランス語の [ɲ] と有意に異なると判断した可能性も指摘できる。

### 3. 2. glace 「氷」 (DFT p.138)

DFT には djraub (Yun.) が採録されている。「氷」の語形については、雲南のチベット系諸言語の中ではバリエーションが少ない。図5は、「氷」の語形式について、その形式をおおまかに分類したものである。

図5の凡例の詳細は次のようである。BRR 類、BRY 類とは、初頭子音にそれぞれ /d/、/j, dz/ を含む類型であり、いずれも蔵文との対応関係を持たないが、おそらくは同一の語源から派生したものとする。CR 類は蔵文 chab rom との対応関係を持つ形式である。SO 類は初頭子音に /s/ を含む単音節語であり、蔵文との対応関係を持たない。KH 類は蔵文 khim と対応する形式である。

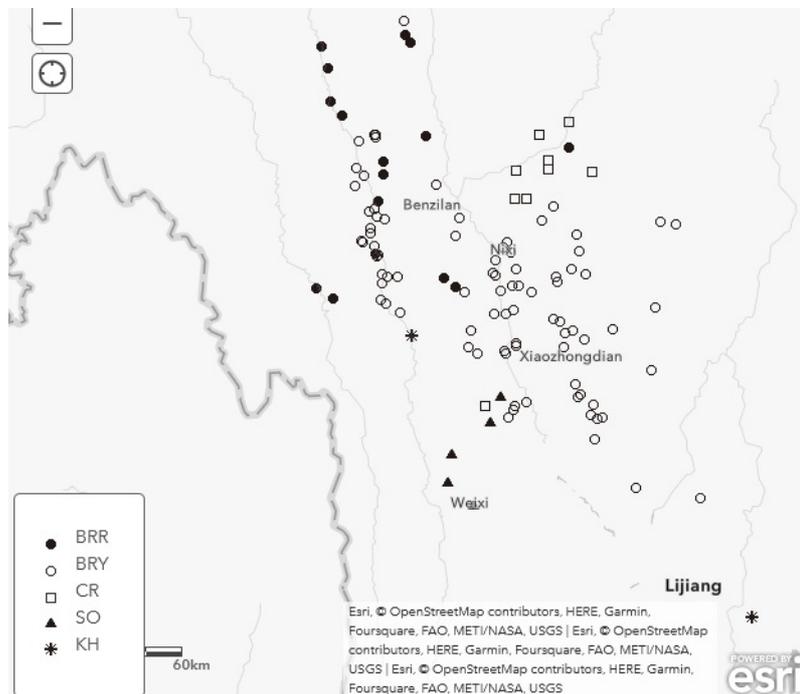


図5: 「氷」の語形式の分類

『フランス語・チベット語辞典』(1956)に記録される雲南チベット語の性質について  
(鈴木博之)

DFTに記載の「氷」の語形式についてまず考える必要があるのは、djraub という音写でどのような実際の音を転写しようとしたかである。DFTを採録した地域の各種言語にも、蔵文にも djraub という音形式に対応しそうな音の配列は見られないからである。

djraub のうち、djr が初頭子音を表し、aub が母音+末子音を表そうとしていると見るのが妥当である。フランス語の音を反映していると考えれば、初頭子音部分は [dʒʁ] のような音が想定できる。ただし、大部分のチベット系諸言語では、[ʒ] (歯茎硬口蓋摩擦音) も [ʁ] (口蓋垂摩擦音) も実際の音声としてはほぼ聞かれない調音である。メコン川流域に分布するチベット系諸言語の場合、その音体系が許容しうる形式としては舌尖部が関与する [dz, dʒ, d] (そり舌~前部硬口蓋阻害音) と舌背部が関与する [ɣ] (軟口蓋摩擦音) であるが、これらが連続することはなく、後者はむしろ後続の母音を軟口蓋化、咽頭化、そり舌化する機能を持つ場合がある (Suzuki 2009, 2011, 2024a)。一方、母音+末子音部分は aub で [o] または [ɔ] を表そうとしている可能性があるが、なぜ音写のつづりの末尾に b が書かれるかの説明ができない。メコン川流域に分布するチベット系諸言語の場合、末尾子音はほぼ [ʔ, wʔ, jʔ] に限られ、両唇音そのものは現れない。しいて関連づけるのであれば、[wʔ] が近いが、もしこのような形式を想定する場合、全体として [owʔ, ɔwʔ] が期待されることになる。

このとき、現代のチベット系諸言語の形式を参照すると、djraub には BRR 類と BRY 類が関連するといえる。前者は <sup>h</sup>dqʔ, <sup>h</sup>dʒʔ/ といった形式を含み、後者は <sup>h</sup>ɔʔ, <sup>h</sup>dzɔʔ/ といった形式を含む (音形の差異の具体的な分布と音韻史上の位置づけについては、Suzuki 2024a, b 参照)。なお、この語形式は、複数の地点で蔵文 'brug 「雷、龍」に由来する語と同一の音形をとる。このような音形式を見ると、djraub という音写はいずれの発音も表しているのではないかと見えてくる。実際、BRR 類と BRY 類は蔵文と対応関係を持たないけれども同一の形式から発展したものと考えられ、その分布は両者で連続しており、特にメコン川流域で両者ともに分布する。Tshodrug 方言について見ると、その形式は BRY 類であり、この形式が優勢であるが、非常に近い地域で BRR 類を用いる変種もまた見られる。

以上のことから、djraub は BRR 類または BRY 類に相当する形式を採録したものと考えられる。現在のところ、DFT の中で djraub に並行する音写形式が見当たらないため、どちらの形式を類型にあたる語形を記録したか明確にはできないが、その当時から BRR 類と BRY 類が両方存在しているために、両者を兼ね合わせた音写をした可能性も否定できない。

### 3. 3. merci 「ありがとう」 (DFT p.180)

DFT の merci の項目には、「慈悲」という名詞のほか、「ありがとう」という表現が与えられている。この中で (Yun.) と指示のある形式として、kianong が採録されている。これは後者の意味で採録されているものと理解し、「ありがとう」の語形式について、その形式をおおまかに分類したものを図6に掲げる。

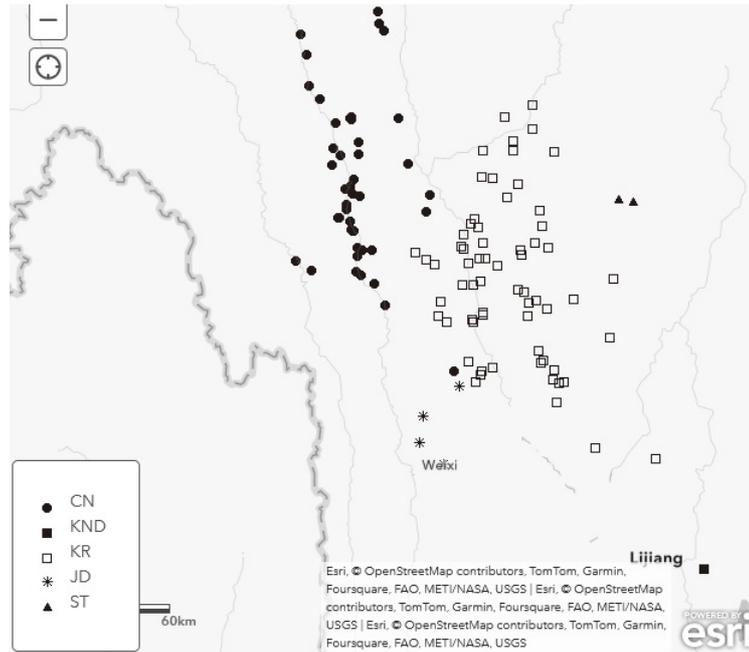


図6: 「ありがとう」の語形式の分類

図6の凡例の詳細は次のようである。CN類は [tʃa ŋɔ̃] を代表とする音形式をもち、蔵文との対応関係は不明である。KND類は蔵文 dka' snang 「(あなたは) 疲れている (=お疲れさま)」に対応する形式となる。KR類は [kʰa rē] を代表とする音形式をもち、蔵文との対応関係は不明である。JD類は [jɛ ʰdɔ:] を代表とする音形式をもち、蔵文との対応関係は不明である。ST類は [ɕʰe: tsʰə] を代表とする音形式をもち、蔵文との対応関係は不明である。なお、以上のほか、いずれの地域でも蔵文 thugs rje che または bka' drin che 「ありがとう」に対応する表現も用いられる。しかしながら、これらはチベット文化圏全体に分布する表現であるため、地図化の対象とはしなかった。

DFTにおける kianong という音写は、現代の諸方言における [tʃa ŋɔ̃] すなわちを CN類を意図したものと理解する。音写に用いられる kia が [tʃa] と対応すると理解する

『フランス語・チベット語辞典』（1956）に記録される雲南チベット語の性質について  
（鈴木博之）

のは無理があるように見え、DFT に並行例はない。ただし、当時の漢語音に対するローマ字表記において、*teia* を *kia* と書く習慣がある（たとえば「江」*kiang* [tɕiaŋ]）ことを思い起こせば、*kia* が [tɕa] の関係は例外的とはみなせない。この口語形式については、DFT は *skyabs snang*（字義は「加護がある」）というつづりを与えているが、現代ではこの形式は蔵文の対応形式とは認められず、この形式と語源として対応するとは言い切れない。問題となるのは第1音節の形式であり、第2音節はおそらく動詞の接尾辞としての *snang*（持続アスペクト＋視覚感知の証拠性；証拠性の分類と体系については *Dawa Drolma & Suzuki 2023* 参照）と対応すると考えて問題ない。*snang* と対応関係を持つ音節自体は、上に述べたように、KND 類の形式にも現れる。また、サルウィン川流域で話される *Bodgrong*（丙中洛）方言では [ʰcɕa nə] という音形を示し、蔵文との音対応という観点から見れば、第1音節は蔵文 *c* を基字とする形式を示唆し、*sky* という組合せとの対応を示さず、また第2音節は *snang* ではなく *ni*（持続アスペクト＋陳述の証拠性）が対応すると見える。

以上に検討した *kianong* という形式は、図6では CN 類でまとめてあり、メコン川沿いを中心に、金沙江沿いでも北部を中心に分布がある。*Tshodrug* 方言も CN 類を使用する変種の1つである。このことから、DFT の記述と現在の語形式の分布に矛盾はないといえる。

### 3. 4. deux 「2」 (DFT p.92)

以上に議論した3つの例では、いずれも *Tshodrug* 方言をはじめとする雲南のチベット系諸言語の形式が記録されていたことが明らかになった。一方で、DFT には現代の雲南のチベット系諸言語から出発して、特定の地域、特に *Tshodrug* 方言を含む小さい地域に限って分布する形式が収録されていない語もある。これは単に記載漏れであるのか、現代の言語形式の分布が変わったため、記録当時は存在しなかった語形なのか、その判別は困難である。このような記述の一貫性に不都合な点があることも、資料的性格を示す点として取り上げる必要がある。ここでは「2」の形式を取り上げる。

「2」に限らず、数詞全般にわたる形態論的特徴はチベット系諸言語の中で極めて安定であることが知られている。「7」が蔵文 *bdun* との対応関係を持つことが、ある言語がチベット系諸言語であるか否かを判定する根拠の1つとして言及される (*Beyer 1992, Tournadre 2005* など) こともある。DFT における「2」の記述は、一貫してチベット文語形式 *gnyis* と共通する記述であり、特別な方言特徴についての記載はない。しかし、DFT の編者が *Tshodrug* 方言やその周辺の方言に触れていれば、異なる語形も

耳にしていた可能性があるのではないか、という疑問が生じる。なぜなら、Tshodrug 方言及びその周辺には、藏文形式とはおよそ対応するとはいえない/mə/という形式が「2」の意味で用いられるからである。その語形と分布の詳細は Suzuki (2018: 39–40) に示してある。その地図によると、Tshodrug 方言方言を含むメコン川流域の、チベット系諸言語の分布域南部を中止とする範囲に/m/を初頭子音とする形式が分布し、その他の地域にはまれにしか分布しない形式であることが分かる。

当然のことながら、DFT が雲南のチベット系諸言語に見られる形式を網羅的に採録したわけではないため、「2」のような例がほかにも見られるであろうことは想像に難くない。DFT は雲南のチベット系諸言語の形式が反映されているところがある、ということであり、当時採録した語形の中に、現代の状況から見ると特別な形式が認められないことの証拠ととらえることはできない。この点に注意して DFT を用いることが肝要である。

#### 4. まとめ

本稿では、DFT に採録された東チベットで話されるチベット系諸言語の口語形式について、(Yun.) というように雲南で通用する語形と指示のある3つの語について、言語地図を作成し地理言語学的側面から検討した。本稿で扱った3つの語について考えれば、(Yun.) と指示される形式はメコン川沿いに分布する変種を採録し、辞書編纂の背景を加味すると茨中で話される Tshodrug 方言を記録していることが妥当と見える結果を得た。これはすなわち、20 世紀前半時の Tshodrug 方言の形式が採録されていることを意味する。

本稿は3つの語のみに限定したが、ここで適用した地理言語学という方法論を用いて考察を進めることで、記録した方言を特定できる可能性があることを示したものである。すなわち、この方法は本稿のような分析に有効であろうと判断できる。とはいえ、辞書に採録される形式は約 100 年前の口語に由来するが、語形を評価するのに用いた資料は現代語であるという問題もある。しかし、もし両者の間に異同があれば、新たに言語史を解釈する作業を通じてさらなる議論が可能になり、言語現象の地理言語学的研究だけでなく言語地理学的アプローチに基づいた言語史の再構築も必要とされる。

一方、これら3語の検討によって、DFT の形式を扱うにあたって異なる問題があることも示された。すなわち、編者のチベット文語に関する知識、語形の変遷の可能性、音写つづりの不透明性といった問題である。特に地域を特定して言及される口語

『フランス語・チベット語辞典』（1956）に記録される雲南チベット語の性質について  
（鈴木博之）

形式は、資料として取り上げるにあたり、本稿で展開したような分析を経て、その語形の性質を確認する作業が必要となるであろうことが示唆される。

いずれにせよ、DFT 内の記述を丁寧に読み解くことで、さらに多くの雲南のチベット系諸言語に由来する形式を見出すことができるだろう。1 つずつ語例を検討し、全面的かつ詳細な研究が望まれる。

## 付記

本稿における言語資料収集のためのフィールドワークは、日本学術振興会科学研究費補助金（16102001, 07J00250, 21251007, 25770167, 16H02722, 17H04774, 18H00670）の援助を受けている。また、本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（23H00625）の成果の一部である。

## 参考文献

・和文、中文

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2004) 《實用藏文文法教程 [修訂本]》成都：四川民族出版社

鈴木博之 (2019) 〈1899 年出版《藏拉法詞典》記載的動詞 snang 的口語用法：從地理語言學的方法來看其方言所屬〉鈴木博之、倉部慶太、遠藤光暁編《東部亞洲地理語言學論文集》43–52. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
URI: [https://publication.aa-ken.jp/sag\\_mono6\\_eastern\\_asian\\_2019.pdf](https://publication.aa-ken.jp/sag_mono6_eastern_asian_2019.pdf)

鈴木博之 (2021) 〈從地理語言學的角度看雲南藏語/l/及/j/的歷史發展〉鈴木博之、倉部慶太、遠藤光暁編《中國語言地理研究論文集》21–38. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 doi: <https://doi.org/10.15026/116769>

鈴木博之 (2022) 「カムチベット語捧八 [Phongpa] 方言の方言所屬」『東京大学言語学論集』第 44 号 e133–e147. doi: <https://doi.org/10.15083/0002005845>

鈴木博之 (2023) 「チャムド市マンカン県の言語事情—ラロン・マ語の存在とカムチベット語の方言区分に注目して—」『日本西藏学会会報』第 69 号 1–12

・欧文

- Beyer, Stephan V. (1992) *The Classical Tibetan language*. Albany: State University of New York.
- Dawa Drolma & Hiroyuki Suzuki (2023) The paradigmaticity of evidentials in Tibetic languages of Khams. *Studies in Language*, online first. doi: <http://doi.org/10.1075/sl.23006.dro>
- DFT = Giraudeau, Pierre Philippe & François Goré (1956) *Dictionnaire français-tibétain (Tibet oriental)*. Paris: Adrien-Maisonneuve.
- DTLF = Les Missionnaires Catholiques du Thibet (1899) *Dictionnaire thibétain-latin-français*. Hong Kong: Imprimerie de la Société des Missions Étrangères.
- de Jong, J. W. (1957) Compte-rendu : DFT. *T'oung Pao* 45.1: 272–274. doi: <https://doi.org/10.1163/156853257X00044>
- de Nebesky-Wojkowitz, René (1956) *Oracles and demons of Tibet: The cult and iconography of the Tibetan protective deities*. 's-Gravenhage: Mouton.
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Deux remarques à propos du développement du *ra-btags* en tibétain parlé. *Revue d'études tibétaines* 16, 75–82.  
URI: [http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret\\_16\\_03.pdf](http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret_16_03.pdf)
- Suzuki, Hiroyuki (2011) Deux remarques supplémentaires à propos du développement du *ra-btags* en tibétain parlé. *Revue d'études tibétaines* 20, 123–133.  
URI: [http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret\\_20\\_05.pdf](http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret_20_05.pdf)
- Suzuki, Hiroyuki (2016) In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10, 99–125. URI: <http://id.nii.ac.jp/1085/00002195/>
- Suzuki, Hiroyuki (2018) *100 linguistic maps of the Swadesh word list of Tibetic languages from Yunnan*. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. URI: [https://publication.aa-ken.jp/sag\\_mono3\\_tibet\\_yunnan\\_2018.pdf](https://publication.aa-ken.jp/sag_mono3_tibet_yunnan_2018.pdf)
- Suzuki, Hiroyuki (2019) How Tibetans classify pigs in their languages in the eastern Tibetosphere: Revisiting the *pig issue* through geolinguistics. In Hiroyuki Suzuki, Keita Kurabe, and Mi-tsuaki Endo (eds) *Papers from the Workshop “Phylogeny,*

『フランス語・チベット語辞典』（1956）に記録される雲南チベット語の性質について  
（鈴木博之）

*Migration, and Contact of East and Southeast Asian Languages and Human Groups*”,  
40–53. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

URI: [https://publication.aa-ken.jp/sag\\_mono7\\_phylogeny\\_dispersion\\_contact\\_2019.pdf](https://publication.aa-ken.jp/sag_mono7_phylogeny_dispersion_contact_2019.pdf)

Suzuki, Hiroyuki (2022) *Geolinguistics in the eastern Tibetosphere: An introduction*.  
Tokyo: Geolinguistic Society of Japan. doi: <https://doi.org/10.5281/zenodo.5989176>

Suzuki, Hiroyuki (2023) Geolinguistic approach to migration history in the  
south-eastern edge of the Tibetosphere: A case study of Sangdam Tibetan and  
methodological remarks. *Asian Languages and Linguistics* 4.2, 224–250. doi:  
<https://doi.org/10.1075/alal.00013.suz>

Suzuki, Hiroyuki (2024a) Shaping rGyalthangic: A historical account of Yunnan Khams.  
In Masaki Nohara & Takumi Ikeda (ed) *Grammatical phenomena of Sino-Tibetan  
languages 6: Typology and historical change*, in press. Kyoto: Institute for Research  
in Humanities, Kyoto University.

Suzuki, Hiroyuki (2024b) Evolution of dorsal fricatives in rGyalthangic varieties of Khams  
Tibetan. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 28.1, in press.

Suzuki, Hiroyuki, Sonam Wangmo & Tsering Samdrup (2021) Geolinguistic analysis of  
‘hand’, ‘wind’, and ‘moon’ in Tibetic languages in sMarkhams, mDzongong, and  
rDzayul counties. *Studies in Asian and African Geolinguistics II—Grammatical  
relations—*, 48–56.

URI: [https://publication.aa-ken.jp/saag2\\_grammatical\\_relations\\_2021.pdf](https://publication.aa-ken.jp/saag2_grammatical_relations_2021.pdf)

Tournadre, Nicolas (2005) L’aire linguistique tibétaine et ses divers dialectes. *Lalies* 25,  
7–56.

Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (2023) *The Tibetic languages: An introduction to  
the family of languages derived from Old Tibetan*. Villejuif: LACITO Publications.  
doi: <https://doi.org/10.5281/zenodo.10026628>

## 2023 年度日仏東洋学会総会報告

【日時】 2024 年 3 月 23 日（土） 13 時 30 分～ 14 時 30 分

【会場】 日仏会館 501 室および Zoom（ハイブリッド型）

### 1. 開会の辞

議長 中谷英明会長

### 2. 総会議事

#### 1) 報告事項

##### (1) 2023 年度活動報告

###### 全般的状況

中谷会長と小関武史代表幹事より、以下の五点を中心に、全般的な活動状況の報告がなされた。

- ・ 日仏関連学会連絡協議会（2023 年 7 月 18 日、12 月 8 日）への参加
- ・ 『日仏東洋学会通信』第 45 号の発行
- ・ 新ホームページの運用
- ・ 講演会
- ・ 東洋学アジア研究連絡協議会（当学会からの参加はなし）

##### (2) 2023 年度決算報告

手嶋英貴会計幹事より 2023 年度の会計決算報告がなされ、承認された。

##### (3) その他

興膳宏先生のお別れ会が 2024 年 3 月 20 日に開催されたことが報告された。

## 日仏東洋学会 2023 年度総会報告

### 2) 審議事項

#### (1) 2024 年度予算

手嶋会計幹事より 2024 年度の予算計画が提出され、審議、承認された。

#### (2) 役員の交替

岩尾一史幹事が『通信』編集委員長を退任し長谷川琢哉幹事が後任に当たること、および、亀山隆彦幹事を新たに評議員に推薦することが提案され、審議、承認された。

#### (3) その他

- ・ 『通信』の学術データベース EBSCOhost への収録依頼について

2024 年 3 月 13 日付で EBSCO より本学会『通信』を学術データベース EBSCOhost に収録したい旨の依頼があった旨が報告され、審議、承認された。

- ・ 学会口座の一元化について

口座間の送金が厳格化されたため、学会の口座を一元化することが提案され、審議、承認された。

- ・ 学術・企画委員会の活性化について

すでに存在する学術・企画委員会を活性化させ、シンポジウム等を実施することが提案され、審議、承認された。

### 日仏東洋学会講演会

「二千年ぶりに解読されたブツダの意識生成分析：仏教と人類にとってのその重要性」

【日時】 2024 年度 3 月 23 日（土） 15 時～18 時 30 分

【場所】 「日仏会館 501 室および Zoom（ハイブリッド型）」

【主催】 日仏東洋学会

【共催】 （公財）日仏会館、龍谷大学、科研費基盤研究（B）23H00566

【講師】 入澤崇（龍谷大学学長）、中谷英明（東京外国語大学名誉教授・龍谷大学特別顧問）、村井俊哉（京都大学）、マルク＝アンリ・デロッシュ（京都大学総合生存学館）

日仏東洋学会令和5年度（2023年度）決算報告

日仏東洋学会2023年度（令和5年度）決算

◇収入

|         |         |
|---------|---------|
| 普通会員会費  | 81,000  |
| 前年度繰越金※ | 435,469 |
| 利子      | 3       |
| 計       | 516,472 |

◇支出

|       |        |
|-------|--------|
| 印刷費   | 44,726 |
| 通信費   | 17,600 |
| 会議費   | 0      |
| 消耗品費  | 0      |
| 支払報酬費 | 20,000 |
| 雑費    | 3,080  |
| 旅費    | 0      |
| HP維持費 | 0      |
| 予備費   | 0      |
| 計     | 85,406 |

総収入－総支出：516,472円－85,406円＝431,066円  
2023年度残金 431,066円は2024年度への繰越金とする。

以上の通り相違ありません。

2024年 3月 15日  
日仏東洋学会監事

森野一史 

2024年 3月 15日  
日仏東洋学会監事



## 編集後記

○ 日仏東洋学会『通信』第47号を御届けします。本号では、新宮一成先生のご論文「日本の神話的アイデンティティとフランスの精神分析」を、鈴木博之先生のご論文「『フランス語・チベット語辞典』(1956)に記録される雲南チベット語の性質について」を掲載することができました。新宮先生のご論文は、2023年3月26日の日仏東洋学会総会におけるご講演を元にご執筆いただいたものです。鈴木先生のご専門は言語学で、特に東チベットにおけるチベット語方言を研究されており、豊富なフィールド調査の経験と綿密な分析で世界的に有名な研究者です。いただきました二論文はいずれも充実した内容ですので、会員の皆様におかれましては、是非ともご一読いただきますようお願いいたします。

○ 2023年10月26日、興膳宏先生がご逝去されました。中国文学者として世界的に名を知られた興膳先生のご業績について、会員の皆様はすでによくご存知かと存じますので、ここであえて申し上げる必要はないでしょう。本号では、日仏東洋学会会長として長らく本会をお支えくださった興膳先生のため、木島史雄先生、小関武史先生、門田眞知子先生に、追悼記をご執筆いただきました。拝読して、興膳先生の生前のご様子を偲ぶとともに、編集子としても

先生の温なご様子を改めて思い出すことでした。興膳先生には、心からの哀悼の念と感謝を改めて申し上げたく存じます。どうもありがとうございました。

○ コロナ禍の収束とともに、社会はすっかり通常の生活を取り戻した感があります。大学や研究においても同様で、授業や学会、研究会は大半が対面に戻っているのではないのでしょうか。ただし、単に元の生活に戻ったというだけではありません。コロナ禍で得たオンラインでの会合は、オプションとして社会に定着した感があります。また、病欠に対する社会の理解も進んだように見受けられます。辛く苦しい数年間の経験でしたが、それでも何がしか得られることはあったようです。とは言え、コロナ感染が根絶したわけではありませんので、会員の皆様には引き続きご自愛いただきたく存じます。

○ 41号(2018年)より編集に関わってまいりましたが、本号にてその任から離れることとなりました。来号から長谷川琢哉先生にバトンタッチいたします。在任中は至らぬことばかりでしたが、会員の皆様に支えられてなんとか毎年度の刊行にこぎつけることができました。改めて御礼申し上げます。  
(岩尾一史)

日仏東洋学会 通信 第47号  
2024年3月31日

日仏東洋学会入会申込み・会費納入受付

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67  
龍谷大学法学部 手嶋英貴研究室  
a21016@mail.ryukoku.ac.jp  
推薦に関しては会員にご相談下さい。

『通信』へのご寄稿

- E-mail による投稿は下記まで  
kazushi.iwao@gmail.com
- CD-Rom による投稿は下記まで  
〒600-8268 京都市下京区七条大宮東入ル125-1  
龍谷大学文学部 岩尾一史 宛

発行者 中谷 英明  
事務局 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67  
龍谷大学法学部 手嶋英貴研究室  
印刷所 有限会社ヤマダスピード製版  
〒815-0031 福岡県福岡市南区清水  
TEL: 0120-939-834 FAX: 092-511-5977